

創世記 1:1

この一言から、聖書は始まる。そして、世界の全ての事柄、自分自身も含めて、一切はここから始まったのだと、聖書は力強く宣言をしている。「はじめに、神が天と地を造られた」。物事の意味を考え、善悪を考え、あるいは幸せを探し求める時、この世界の成り立ちを知ることがどうしても欠かせない。その正体を知らないままに勝手な思い込みで扱おうとするなど、目の前にある薬品の正体も知らずに、適当に混ぜ合わせようとするようなものだ。だから聖書は、これを第一声とする。そして、もし世界について、人間について、いや、今日の明日の自分の歩みについて少しでも考えたいと思うなら、この世界を造った神に思いを向けることを、強く勧めている。私たちもこれから、その呼びかけに応ずるようにして、この言葉から始まる世界を、よくよく見直してみたい。

創世記 1:1

神が世界を始めた、という聖書の主張は、私たちの人生観や世界観に、強い影響を及ぼす。逆の考え方を思い浮かべてみると、話は早い。世界は偶然の産物であるなら、善悪の絶対的な価値観などは存在しないはずで、せいぜい、どっちが得かという話になる。人間も植物も同じであるのなら、道ばたの草を守るためには踏みつけそうになっている人間を突き飛ばして、死に至らしめても悪くないはずだ。いやいや、人間は高度に発達した存在だから意義があると考えるわけだが、とすれば、人間自身の間にも、価値のある人と、そうでもない人がいると見なされても不思議ではない。けれど、始まりが神であると知るならば、物事の意味や意義がすっきりと見えてくる。ここで進化論そのものについて取り上げることはやめておくが、聖書は明確に神の創造を語り、神を忘れた価値観、世界観の無意味さを高らかに告げていることだけは覚えておくほうがよいだろう。

創世記 1:2

ここにある「茫漠」という言葉は、あまり馴染みがない。実はこれ、木も草も何もない荒れ地を表現する時にも使われるらしい（私は言語学者ではないのでこのあたりは受け売りである）。別の例を挙げれば、空っぽの部屋である。これから誰かが引越してきて、家具を入れ、飾り付け、生活のにおいを作り上げていく、その前の状態である。

つまり、世界が造り出されていく様子が、順を追って語られているのだ。神はまずこの世を造られた。スタートのところだから、まだ中身は空っぽ。それから順々に必要なものを作り上げ、途中からは人間たちにも手伝わせて（後で述べる）、そうやってこの世界を「良い」ものへと整えていく。CSルイスがナルニア国物語を書いた際、このイメージに近い光景を描いていた。聖書のこの語り方には、神が最善のものをしっかりと考えて、整えつつ、組み立てて行かれ

る、そういう精力的で熱意の込められた業を見出すことができる。偶然なんてとんでもない。こだわりにこだわって、神は世界を築いて行かれたのだ。

創世記 1:3-5

神がまず整えたのは、光である。ヨハネ1章でも、キリストの到来が光にたとえられているように、ここから全てが始まるというのは、ごくごく自然な理解でもあろう。天文学者はこれとビッグバンを重ね合わせるみたいだが、その類の話は別の機会に。ただ、気をつけるべき点は、ここでは神は、やみについても、ご自分の創造の中に置いていることだ。後に、罪の問題をやみとして語るようになるのは後付けの表現であって、もともとは、この世界にある全てのものについて、神が創造者としての權威を表明しておられることを知っておきたい。そう、もともと神とは別の世界や勢力があったのではない。神のもとにあったものが、勝手に離れていったための混乱であり、邪悪さであるのだ。だとすれば、どれほど

のやみでも、神に勝てる可能性など皆無であることが、よくわかるはずだ。

創世記 1:3-23

目の前に精巧なブラモデルがあるとすると、これについて説明する際に、作り方の手順を図入りで詳しく提示するのも一つの方法だが、完成品をつぶさに鑑賞しつつ、その優美さや性能などを語っていくという手法もある。創世記がどちらの方法を採ったのかは、今ひとつ、分かりかねる。少なくとも創世記は、遙か後に人間たちが編み出した進化論に反論するために書かれているわけではないから。でも、神が世界を造られたことを知る者にとっては、上記2点のどちらでも大差はない。結局、大事なことは、世界をどうやって造るかではなく（人間には造れない）、神がどんな意図を込めておられるのか、あるいは完成品についてより深く知るための情報であるからだ。その点を忘れてあれこれと論ずるだけでは、聖書を読むにあたっては、どうなのだろうか、とも思う。

創世記 1:6-8

二日目に神が造られたのは、空である。昔から、神は天高いところにおられるというイメージがある。つまりは、人間の手の届かないところということであるのだが、だとすれば、大地について語る前に、天が登場するのは当然である。大地は人間の住むところというイメージがあるわけで、そっちが先では、神は後から出てきたという印象になってしまう。初めに神がおられるということは、しっかりと強調しておかねばならない。しばしば、人間の思いが神を「想像」したのだと言われたりする。人間にそれだけの空想力、あるいは思索能力があるとは誰もが認めるところだ。でも、天におられる神は、人間たちの思いを常に飛び越えて、まさに信じられないような事柄を示しておられる方だ。人の編み出した存在では、何の価値も、意義もない。人の居場所ではなく、神の居場所（と理解されていたもの）が先になるのは当然である。

創世記 1:9-13

三日目は、陸地と海、そして植物の創造が語られている。天という神に関する事柄が語られたので、論理的順番としても、次は被造物の側ということになるわけで、陸地と海の登場はしごく当たり前である。植物も同じ日に重なっているが、神が必要と思うものを次々と造っていったら、たまたま6日かかってしまいました、ということではないはずで、最初から6日にまとめようとなさっておられたに違いない。その上での妥当な割り振りをお考えになったはずだ。その点では、神が植物と動物との間には大きな違いを意識されているのだな、ということを考えさせられる。やはり植物は動物を生かすために役立つ存在なのだ。ただし忘れてはいけない。創造の枠組みからすれば、植物があつて、その上での動物である。植物を根絶やしにして人が生きながらえることなど、できるはずがないのだ。森林を好き放題に伐採し続けた人類の愚かさは、創造の枠組みを顧みない愚行でもある。

創世記 1:14-19

四日目に太陽、月、星という天体が登場している。これらのものを造った目的についてここには、昼と夜、日、季節、年などといったことによつて、時を整えていくことが語られている。もちろん、天体の存在意義はそれだけではなく、太陽ならば光と熱をもたらすものであるし、引力のこともあるし、人類がまだ気づいていない作用もあるだろう。でも、創世記は百科事典の「太陽」という項目を書き記しているわけではないので、注目点だけに絞っているのは当然だ。それが、時を整える意味合いなのである。

聖書には永遠という言葉が出てくる。永遠の神、あるいは永遠のいのち。だがそれは、無限にある時間を漫然と過ぎ去らせていこうというものではない。むしろ、その時々「今」というものをしっかりと見据えつつ進んでいくことが、神の御心である。それは、間もなく人間という時に対する意識を持つ存在を造り出す、その準備とも言

えそうである。私たちは、与えられている時を、ちゃんとん生きているのだろうか。(決して、焦つて頑張ろうという意味ではないのだが)

創世記 1:20-23

五日目は魚の類と鳥の類である。「進化」のように、より発達して頂上を目指していくという感覚で言えば、水生動物あるいは空を飛ぶ生物が最も発展したものになったとしても、格別不思議ではない。SFの世界には、そういう知的生命体もよく登場する。だが聖書は明確に、人間という存在をゴールとして定めて、そのために必要な環境を整えるという意味合いを込めつつ、この世界が形成されていくことを語っている。このような順番に論理的正当性などはない。だが、最初から人間の出現を意図して、そのために必要な世界を形成するという企画書が用意されていたのであれば、これ以外の順番はあり得ない。神が強く意図して、人間たちを生み出していこうとされていたのだということが、こういった順番からも

明確に見出すことができる。

創世記 1:24-26

六日目は、陸上を歩む動物たちの創造である。神の意図されている順番が、人間という存在に向けて進んでいくものであることが分かるだろう。人間が最後になっているのは、物事を順番に動かしてきたら最後が人間でした、ではなくて、人間を登場させるために必要な準備をしていく、ということの結果であることが分かる。

それにしても、これだけ多彩な動物たちの世界について、聖書は簡単にしか語っていない。ノアの方舟の時のほうがはるかに詳しいくらいだ。そのことも、同じ6日目に人間が登場するので、その意義をかすませないため、と言えるだろう。そう、人間は6日目に、動物たちと同じ日に造られている。私たちはここに、いわゆる生物としての人間が、他の動物たちと同類であること、その一方で、神の思い入れは特別であることの両面を見ておくべきだろう。詩篇8篇を参照したい。

創世記 1:26-28

人間を造ることは、神の計画された創造のクライマックスである。「神のかたち」という言葉が出てくる。人間が神と形状が似ているという意味ではなく、心の状態にしても、決して同類ではないのだが、大事な点で、神との深い関わりがあり、神の思いが込められた存在、ということである。

一つは、神と心を通い合わせることできる存在ということだ。信仰とか愛という関わりも、私たちが自ら選んで、神と結びついていこうという、そういう姿勢の結果だからこそ意味がある。それは決して、洗脳とか強制ではないのだ。もう一つは、神から託された役割を果たすために存在しているもの、ということである。神は創造の御業において、人間たちをこの世界に置き、役目を与えられた。「支配」という言葉が出てくるが、私たちの感覚では管理とか統治というほうが似つかわしい。最後に、神の愛が注がれている存在ということである。神がこれほどに強い思いを込め、犠牲も

払って取り組んだ相手は他にはない。

人はこの世界において特別だが、それは「神のかたち」であるからこその特異性である。だから、神との関わりを失った時、人はむしろ動物たちと似たような存在になっってしまったのだ。

創世記 1:29-30

ここを読んで、菜食主義こそ本道、と言うのは、ちよつと短絡かもしれない。確かにここでは神は、植物を食物として指し示しておられるが、9章では肉食を認めておられる。使徒9章にあるように、神が良いと言われたものを否定するのは好ましくない。もちろん、自らの体調や好み、選択としての菜食主義を否定するものではないが、それよりも、神が人をはじめ動物たちの食料にこれほど心を配っておられることに感銘させられる。「日ごとの糧を与えたまえ」と祈りなさいと教えられたキリストの言葉は、創造のはじめからの神の御心そのものにつながるものなのだ。食べるということをいい加減にしすぎている我々は、猛

省する必要があるそうだ。食材を無駄にしている点でも、あるいは、互いに分かち合うことを無視している点でも。

創世記 1:31

この言葉は深い感慨をもたらす。そう、この世界は「良い」ものだ。神は決して、中途半端なものや、仮のものを作ったのではなくて、これ自体として、本当に良いものだ。たとえ聖書は明言する。厭世的な感覚は、本来、御心には合致しない。もちろん、人の罪によって混乱し、ひどい状態になってはいる。だが、それでもなお、「良い」と言われた創造の作品は、その意義を失ったわけではない。詩篇にも見られるように、私たちはこの世界をちゃんと受け止め、ちゃんと楽しみ、そして、ちゃんと用いていく必要がある。それを怠ることは、つまり神の御業を軽視することであり、神を冒瀆するものだと言われても仕方がない。天国の良さはもちろんだが、だからこの世は・・・という否定的な感覚はあり得ない。この世界をだめにしたのは人間自身

であり、世界そのものが悪であるわけではない。

創世記 2:1-3

神が疲れて、休息が必要だったわけではない。明らかに神は、6日で事を成し遂げると決めておられて、そのとおりに集結させたということだ。注目すべきは、完成を告げることと、休むことが同じ意味合いで語られていることである。とすれば、休みとはつまり、仕事の完成を志すからこそなおさらのこと、きちんと取るべきものということになる。もちろん、私たちの取り組みでいる仕事は「完成」という言い方にはほど遠いかもしれない。でも、ここまで来た、ここまで達成したという確認と、守り導いてくださった神への感謝は、先へ進もうとするからこそなおさら、決して忘れてはならないものはずだ。7日目に休むということを通して、私たちは創造の御業を受け止め、自分たちに与えられた役割（神のかたち）を思い、そして、人々が楽しく憩うていることに心を慰められるのだ。

創世記 2:4-7

人間は土地のちりに過ぎない、という言い方は、この箇所を背景とする。実際に人の肉体を形成している素材を分析すると、その配合の様子などは、いわゆる土とよく似ているのだと聞いたこともある。だが、そんな程度の素材に、神が「いのちの息」を吹き込まれた時、人は人となり、とてつもなく大切な存在となり、何にも代え難いものと言われ、神ご自身もおしんどくださるものとなる。この違いの大きさを、よくよくわきまえておく必要がある。そして、おごり高ぶり始めた時には、神から与えられたいのちあつてこそ自分の価値であることを、よくよく自戒していききたいものだ。なお、ここで言う「いのちの息」とは、肉体的な生命のこともあるだろうし、もう一つ、「神のかたち」と呼ばれた事柄、神と関わるものとしての存在ということも関係する。後に人が神から離れた時、後者はすぐに、前者は徐々に失われていくことになる。

創世記 2:8-14

神は人をエデンに置かれた。天国ではないが、地上の中でも、特に保護された場所であったと思われる。まだ人が「増えて地を満たす」前だから、限られた空間を用意するほうが暮らしやすいと考えられたのだろう。だが、本来としては、「地を満たせ」というのが神の命令であるからして、いずれはエデンから先に広がっていくことは予定されていたはずである。人に託された使命を考える時、いつまでも樂園に留まっているだけという方は、御心に沿うものではあるまい。最初の段階では必要だけなく、自分が居心地良くというだけではなくて、今度は他のもののために労していくことが、神が人を造られた意図に含まれている。祈りもそうだ。自分の願いを求めるのは当然のこと。それで一杯になるのも悪いわけではない。だが、そこから先に、神の恵みを受けた者として、他の人々のために、その幸いのために必死に祈る者となっていくたいものだ。

創世記 2:15-17

神が人に与えた命令は、1章では「生めよ、増えよ、地を満たせ、地を従えよ」というふうにあるが、2章ではここに二つのことが告げられている。

一つは、1章とのつながりで、地を耕し、地を守るという役目である。いわばこの世界に関する管理者である。人はこの世界の上に君臨するのではなく、この世界を利用するのでもなく、神の命令に基づいて、他の被造物と共存し、全体の繁栄と幸いを培っていく使命があるのだ。

もう一つは、神との関係であり、神の禁止命令を守ることを通して、神を信頼することや、神に従うこと、そして、神の言葉を最も大切な礎とすること、つまりは、神との結びつきを、絆を堅いものとするのが、問われている。人間同士でも、相手の言うこと、求めること、期待すること、その感情をどれだけ尊重し、大切に应じていくかによって、その関係は定まっていくのであるから。

創世記 2:17-25

この箇所からはいくらでも話ができるので、このシリーズでは一点だけ述べておく。神は人が一人であることは適さないと言われている。結婚だけでなくこれは、人は人と共に生きること、つまり社会が形成されることを指し示している。そのような社会を形成する上で、人が人と関わっていく環境を作り出す上で、神が結婚と親子関係というものを、その手段として用いることになさったということも考えさせられる。人間という神の目から言えば、実に特殊な存在を増え広げていこうという話なのだから、その気になれば神は、個々の人間たちを、それこそコウノトリに運ばせて送り届けるというやり方もあり得たはずであるし、または、一人前に育ててから送るということもありえたはずだ。神にとっては何ということもない奇跡のはずである。だが神は、この大事な人間たちを、人という親から生まれさせ、人の手で育てさせることになさっている。神がご自身の創造の御業に人

を参加させることを、どれほど意図されていたのかを痛感させられる事柄だ。

創世記 3:1-7

つまりエバは、神の告げられた言葉よりも蛇の言葉を信用し、それ以上の自分自身の判断を優先させたということになる。これでは信頼も何もあつたものではない。ここが一番の問題なのだ。あの木の実に毒があつたわけではないし、木の実を盗み食ひしたくらい天地を揺るがすほどのことではないとも言えるだろうが、でも、彼女は神を軽視し、いや、どうでも良い相手と見なし、捨て去つたのである。この事件が決定的な事態を生じさせたのは当然であろう。もし彼女が、その木の実を食べたいと願い、神に許可を求めたとすれならば、話は全く違つていただろう。神はきちんと禁じる理由を語られたかもしれないし、あるいは、いいよとおっしゃつたかもしれない。どちらでも、彼女と神との関係は、むしろ進展したはず。そして人類は今もなお、神に対してこの時と同じことをし続けている。聖

書はそれを罪と呼ぶ。

創世記 3:6-7

この事件について、よく、エバが悪いという言い方を耳にする。だが、アダムは何をしていたのか。はじめからそばにいたのだとしたら、どうして止めなかったのか。それこそ力づくでも。あるいは後から知つたのであるならば、なぜ、一緒に食べておしまいにしているのか。必死になつてエバに語り、そして自ら神に告白して、彼女に代わつて赦しを請うべきであつたはず。だが、アダムは何もしていない。「アダムの沈黙」という本があるけれど、その指摘は鋭い。

夫は夫婦におけるリーダーであると言う。だが、その意義を私たちは間違つて受け取っているようだ。それは支配ではなく、思うがままの方向に引っ張っていくことでもなく、夫婦が、あるいは家族が、神の前に正しく立ち続けるために、必死で取り組む責任があるということである。アダムはそれを放棄した。今の男性たちはどうなの

だろうか。

創世記 3:8-9

この箇所にも、深く心を動かされる。神はもちろん、アダムたちの行為を知つていたはずだ。それなのに神は、何事もなかったかのように、いつもと同じようにして園を歩き、人間たちとの交流を持つとさされている。そしてまた、神ご自身のほうから呼びかけてこられている。彼らを求めて、彼らを探して。

罪を犯したら、直ちに天から火が降つて滅ぼされる、というイメージを抱く人は少なくない。だがそれは聖書の語る神の姿ではない。神は罪の有無を調べて罰を下す審判者というだけとは違う。この方は、罪に堕ち、神を捨てた人間たちを、いつもと同じようにして求められたのだ。キリストが、迷子の羊を探す話をなさったり、放蕩息子を迎える父親の話をなさつたことと、ここにあらる神の姿は、深く結びついているはずだ。そしてだからこそ、彼らがなすべきことは、「ごめんなさい、赦してください」と謝

ることであつたのだが。それができない人間の悲しさは、現代にまで続いている。

創世記 3:10-13

人間たちの過ちは、木の実を食べただけではない。自らの行為を責任転嫁したことでもある。彼らは自分が悪かつたとは全く認めない。仕方がなかったのだという言い方である。全く成り立たない話であることは、3章前半を読めば一目瞭然であるのに。アダムが最も醜い。彼は最愛のものと読んだはずのエバに責任をかぶせ、さらには、「こんな奴をそばに置いた神が悪い」と言わんばかりの言いぐさである。罪を犯した彼らを、なおも求めておられたる神の思いを、徹底的に拒絶してしまう姿である。

現実問題として、罪を犯さない人間はいない。それをわずかでも肯定的に言うことはできないのだが。でも、それが現実であるのなら、私たちが自らに問うべきことは、その先でどうするかである。神に赦しを請うのか、それとも、神から逃げることを考

えるのか。イザヤ55章の言葉を思い出した。い。

創世記 3:14-15

蛇に対する宣告だが、この言葉を見ても、そこにいるのが単なる動物の蛇ではないことは明白だろう。地を這う云々も、もともと動物がそういう動作することに何もマインスのイメージがあるはずもなく、比喩である。そう、宣告の相手はサタン、悪魔、試みるものと呼ばれている存在だ。

だが、私たちにとってより重要なのは5節で、これを「女性に蛇が嫌い」程度の物語にすり替えては、神の心に気づかないにほほどがあるというものだ。女の子孫は「彼」であり、ある特定の誰かを指している。そして、かかるとに噛みつかれるというつらい目に遭いつつも、相手の頭を踏み碎いて決定的な勝利を手にする。むしろ、これだけを聞いても何のことか分からない。だが、私たちはキリストの出来事を知っており、十字架を知っている。だから、なるほどと分かる。この箇所は最初の福音（良

き知らせ）と言われている。

創世記 3:16

子を産むこと自体に、何か刑罰の意味があるわけではない。もともと神は、「生めよ、増えよ」と祝福されていた。だが、罪の結果として病が入り、死の問題が入ったのと同様に、神の祝福である最善のものですら、多くの課題を抱えることになる。その一つが指し示されている。もともとがすばらしい幸いであるからこそ、事例として指し示すには最も衝撃的でもある。

同時にここには、人間関係の崩壊が語られている。神の罰と言うよりは、人が自らなしてしまった崩壊である。すでに木の実を食べた時、そして、責任転嫁の時に、この事態は始まっている。まさに、人が自ら壊してしまった幸いである。人と人との間の平和を求めるならば、やはりどうしても、自分自身の回復を必要とする。砕けた心のままでは、寄り添おうとすればかえって傷つけることになりかねない。その現実を、私たちは日々見せられているはずだ。

創世記 3:17-19

アダムの責任が明確に指摘されている。そして労働が苦しみとなった。理由は、頑張っているのに見合っただけの収穫にはならないということと、それから人間関係の破壊による孤立化の問題、そして、盗みなどのように力で奪い去られていることの横行。世界を治めるためのものだった仕事、苦しみとなってしまった。

そして死である。いのちの源である神を捨てたのだから、死は当然の帰結である。神から与えられたいのちの息を投げ捨てた以上は、人はもとのように土地のちりに過ぎないところへ戻るのは当然のことだ。人はそうやって、自分たちが何を捨ててしまったのか、そして、神を離れた自分たちが何者であるのかを思い知らされるのだ。つらい、しかし人が自ら選んだ道である。

創世記 3:20-21

エバという名前がここで初めて登場する。

以前から呼んでいたのかもしれないが、聖書はあえてここで、「すべて生きているものの母」として彼女を語る。今まさに、罪の中に堕ち、死を招いたところであるのに。罪に対する厳しさには、いささかも免じるというようなものはない。だが、神は同時に彼らに、深い思いを注ぎ、彼らの存在をそれでもなお尊いものだと思ってくださっているのが、しみじみとわかるではないか。悪を行う者に対して、最も厳しいのも、そして最もあわれみ深いのも、神ご自身なのだ。

そのことは、皮衣を与えてくださったということにも現れている。このことを、罪を覆うためにはいのちをもつてする必要がある、というふうにまで読み込めるかどうかは何とも言えないが、人間たちのことを心配してくださっていることはよくわかる。後にキリストは「何を着ようかと心配するな」とおっしゃられたが、神は確かに私たちの暮らしそのものにすら心をかけてくださっている。

創世記 3:22-24

永遠が取り去られたのは、罰でもあるが、あるいは、神のあわれみであるのかもしれない。人の罪のゆえに、この世は痛みと悲しみに満ちたものとなってしまったのだから。もし人が、この世で経験する全ての痛みを抱えて永遠に生きるとしたら、これほど苦しいものはない。人にとって幸いである永遠は、神が新たに用意してくださるもの。この墮落の出来事は、キリストの語られた永遠のいのちの約束へと、密接につながっていく。

なお、エデンが閉じられたことが記されており、人はもはや、地上での樂園に憩い続けるわけにはいかなかった。聖書は、この世が再びすばらしい樂園となるとは語っていない。人類がもともとと発展すれば、世界は最良のものになると考えている人もあるが、少なくとも聖書は、違うと言う。そういえば、鉄腕アトムの世界はすばらしく科学技術が発展していたけれど、そこにある悪と悲しみは、私たちが経験しているものと何も変わりがなかったのを思い出した。

創世記 4:1-7

ここに記されていることこそ、まさに悲惨さの極みである。子どもの誕生はアダムとエバにとって大きな慰めであつたはず。それなのに、待っているのは兄弟殺しである。

なぜ神がカインの捧げ物に目を留めなかったのかは、昔からいろいろ言われているが、聖書は明確には説明していない。ただ、アベルの行為がまさに神の心になう姿であつたことに比べて、カインのそれは、とりあえずしています、という感じに見え、るとは言えるだろう。神が意図されたのは、カインが自らの行為をよくよく顧みて、その意味、その意義、自分がどう思うでなしているのかを振り返ることであつたのかもしれない。だがカインは、アベルとの比較にしか目が行っていない。そこに悲劇が待っていた。

比較が我が身を問い直し、先へ進むためのきっかけになるのであれば良い。だが多くの場合人々は、人よりもましかどうか

ばかり注目し、だから、みんなして悪い状態ならばそれでもOKとしている。自分が改善されるよりも、人を引きずり落とすことで上に立てばよいというのは、あまりにも悲しすぎる。

創世記 4:6-7

この警告を、どれほど人は無視してきているのか。罪は戸口で待ち伏せしているのだ。人はその誘いにあっけなく負けるのだ。それなのに、我が身を律することもせず、神に助けを求めることもせず、あたかも、どうぞ誘い込んでくださいと言わんばかりの姿。「試みに遭わせないで、悪からお救いください」との祈りを教えられたキリストの言葉を、自分の心の中にしっかりと刻み込んでおく必要がある。この無防備さは、文字通り命取りになるのだから。

創世記 4:8

どんな目的、利益のためであろうとも、人のいのちを奪って良いという話はない。

だが、アベルを殺して、カインにどんな利益があるのか。アベルがいなくなれば、神が自分に振り向いてくれるという可能性は皆無だし、普段の暮らしという点では、アベルが何かカインに不利益をもたらしていたわけではない。でもカインはアベルを殺す。ただ、アベルが自分とは違うことをしているから、そして、神がアベルをお認めになったということ、それだけで。

まさに神が語られた通りだ。怒りは全てを壊す。回りも、そして自分自身をも。放置して、それでも何とかなるということとはあり得ないのだと、よくよく心しておきたいと思う。もちろん、怒りへの対決は簡単ではないが、だからこそなおさら、切に祈り求める必要がある。その点では、自分で怒るのではなく、神にこそ委ねて、「主よ、この事態をなんとかしてください」と願うのが最も良い。

創世記 4:9-16

カインの罪状は明らかで、罪から来る報酬は死であり、だとすれば、カインはただ

罰せられ、削除されるべき存在であつたはずだ。アダムたちもエデンから追放され、死を身に帯びたのだから。けれど神は、彼に呼びかけ、彼と対話し、さらには彼の願いを聞き入れて、「誰も彼を殺すことのないように」というしるしまで与えた。

聖書を読み進めるならば、罪に対する神の厳しさを疑う余地など全くないことは明らかである。けれども同時に聖書は、罪を犯した人間たちへの、神の強い思いを語り続けている。アダムたちにしてもカインにしても、である。御心は人には推し量ることすらできないほど広く、深く、とされているように、これほどのカインなのに、なおも神は関わり続けておられる。残念ながら、カインの態度には悔い改めの様相を見ることができない。だが、神ご自身はそれでもあきらめてはおられなかったのだらうと、そう思わずにはいられない。

創世記 4:17-24

カインの系譜と言われている箇所に出てくるのは、いっく普通、ようするに単

に人間であるという、そういう部類の存在だ。その分だけ分かりやすく、なじみ深いようにも思える人々の姿。そして、そこに現れているのは、人間こそがすべてという思いに支配された、自らの弱さも限界も知ろうとしない、つまりは神は不要だと言いつける部類の人々である。神によって造られた人間だから、そこそこに良きものを生み出すことは可能だ。神を知らずともそれなりに「よい」人として行動することや、貢献も期待はできる。だが、聖書は明確に、それでは足りないのだと言い続けている。人が人であるためには、神ご自身によつていのちの息を吹き込まなければ。カインは別の道を選んだ。神によつてつけたいたしたしるしを持つ身なのに、彼の目はもはや神を見てはおらず、自分自身でしかない。この箇所を読んでいる自分の目は、ちゃんと神を見ようとしているのかどうか、問い直したほうが良い。

創世記 4:25-26

この箇所は、とても印象深いものの一つ

である。エノシュという名前は、「人間」という意味合いの言葉から出てきている。ただし、アダムという言葉が力強さを感じさせるのに対して、こちらはもつと弱いイメージがある。「優男」とか「弱男」という名前を息子につけるようなものだ。しかし、セツにとつては、まさにそれが自分たちの実感であつたはず。長兄は次兄を殺し、結局ふたりとも、家からいなくなつてしまった。人間の罪がもたらす忌まわしさを痛感させられた彼らは、だからこそ、主の御名によつて祈ることを始めている。それ以前も、様々な儀礼的、あるいは、単なる願掛け的な祈りはなされていたのだから、もつと密接に、神とちゃんと向き合つての祈り、あるいは会話は、あのエデン以来、途絶えていたと言うことだろう。人は、自らの弱さ、限界を認める時にこそ、真に神と向き合うようにもなりえる。弱さという真実を認めない愚かさを、私たちは常に持っているのだ。

創世記 5:1-20

ここは一気に行こう。目を惹くのは寿命の長さであるが、忘れてはいけない。アダムたちはもともと、死なずに済む境遇であつたのだ。アダムがエデンでどれだけの日々を過ごした後のことであつたのかは分からないのだが、限界があるという現実とは、彼らにとって罪の意味を嫌と言うほど思い知らされるものであつたはずだ。ちなみに、長ければ良いとは限らない。小説の話だが、1000年単位で生きる主人公が、もう疲れたと言つて、人生に飽き飽きしている様子が描かれているものもあつた（身体は元気なのだが）。生きて、死んで、という繰り返しは、この問題の多い世界に関しては、神のあわれみだと言う人もあるくらいなのだ。ちなみに、この年齢をグラフにして並べると、ほぼ同時期に亡くなっているのだという指摘もある。もともと、ここに挙がっているのが、系図の全ての人であるという保証はどこにもないのであるが。

創世記 5:21-24

不思議な人が出てくる。聖書はあえて彼

について、「死」という言葉を使っていない。生物学的に言えば、彼もまた死んだのは間違いない。どのような死に方であつたかは分からないが、でも、彼の生涯の終わりは、創世記3章で宣告された罪の結果としての死とは違うものであり得たのだということだ。そう、死ななければならぬのではなく、神のもとへの旅立ちとしての終わりである。神と共に歩み、神によつて取られたエノクは、神と共に歩み続けるのである。人の地上での日々には、必ず終わりが来る。それがどのようなものとなり得るのかを思わせられる。善行を積み重ねてくれば良い終わりが、という話ではない。多くの間違いや失敗に後悔は尽きないかもしれない。だが、それも全て含めて、その終わりの時を、神と共に迎える者でだけはないと、そう願わせられる。

創世記 5:25-27

メトシェラは、聖書に記されている中で最も長く生きた人ということである。実は、それ以上には何も彼についての言及

はない。まあ、ギネスブックであれば、長寿と言うことで十分に評価され得るのだけれど、でも、記録という感覚を離れて、一人の人間の生涯ということを思う時には、はたしてどうなのだろうか。もし、メトシェラの日々が苦勞の連続であつたとしたら、その99年は、その長さゆえにかえつてつらいものであつたかもしれない。楽しいことが続いていれば、それはうれしかっただろうが、それでも99年もあれば目新しいことはまずなくなり、以前の繰り返しになつていたかもしれない。長ければいいとは言えないことの象徴が、メトシェラという名前に込められることもある。ようは、長短ではなく、その日々がどれだけ祝されたものであるのかどうか、なのだ。私たちは何を求めているのだろうか。

創世記 5:28-32

久しぶりに、命名に関する話が出てきた。子どもの誕生を慰めとして受け止めるケースは、聖書にもいくつも出てくる。レメクの言葉の通り、それだけ歩んでいる日々は

苦しみが多かったということだろう。せつかく与えられているのちが、人生が、これほどの苦闘となつてしまった原因は、もちろん人間自身にある。そんな私たちにとつて、新たに生まれてくる子どもたちは、やはり、希望の星であるのだし、だからこそ、大きな慰めともなる。その子たちのためにと願ひ、良い日々を用意してあげたいと願う。誕生に伴う親の思ひはきつと誰でも同じだ。ただ、その思ひがいつの間にか忘れられ、慰めの子であつたことを見失ひ、ただ自分の思ひのままに操作したり、あるいは子どもたちの幸いを忘れて自分のことしか考えなくなつていたり。もし社会が、子どもたちが慰めとして誕生したことを忘れずに動いていけるとしたら、どんなにか違ったものになるのではないか。

創世記 6:1-7

ここに「神の子」を何か特殊な存在として考える人もある。ネフィリムなる存在のこともあつて、ファンタジー的な感覚を持ちやすいためだろうか。でも、もっと

落ち着いた読み方をして、神の子とはセツに始まる、主の御名によつて祈つていた人々の系譜と考えることに賛成する。だが、その系譜もまた、徐々に他と混合していき、結局はそういう特性も失われていったのだ。だから神が人を造つたことを悔やむという、まさに異常事態が起こっている。洪水は決して、神が怒りに身を任せて起こしたものではなく、思案に思案を重ねた結果のものである。私たちは事の大きさに衝撃を覚えるのだが、神の心の内ではむしろ、ノアの一家を残したということにこそ、強い意義が注がれていたに違ひない。人類は自らの力では何一つ解決できない存在。自らの罪ですらも。それがわかりだったからこそ、神はこの洪水を決意なさるしかなかったのだ。

創世記 6:8-13

墮落と暴虐。それは神に対する反逆であると共に、この世界そのものを滅ぼし尽くそうとする行状だ。この時の状況を私たちは正確に知ることはできない。だが、アダ

ムたちをその場で消滅させずに、なお顧みておられた神が、ここに至つて決断せざるをえなかったほどのものだということは分かる。この洪水を残酷だと言うことは、少なくとも人にはできない。自ら招いた結果だからだ。しかも同時に、ノアを残したことに於いて、神は再生を意図されていることも分かるわけで、神が人間について、なおもあきらめていないということを知らされる。ノアにしても、決して完全ではなかったのに。

なお、人間たちが自分を滅ぼそうとすれば神が介入してこの世を終わらせる、と考えている人々があるが、それは大いなる勘違いだ。神はこういうことを二度としない、とおっしゃっている。この世が終わるのは、最悪の時とは限らない。神が「これで十分」と考えられた時である。間違えないで。

創世記 6:14-22

現代の単位にすれば、長さ132メートル、幅22メートル、高さ13.2メートル。タンカーに似ているという人もある。その道の

専門家たちは、航行するには今ひとつ、でも、安定して浮かんでいるためには最適な形状だと言う。神が指摘された動物たちは、これだけあれば収容できるらしい。食料も含めて、である。ただし、作るほうはとても大変である。しかも、ノアの家族だけ、かもしれない。まあ、ノアに財力があれば、人を雇って作ったとしても問題はなはずではある。しかし、いずれにしてもとてつもない作業であり、相当の年数がかったことだろう。もしかすると、神はそうやって人類に呼びかけておられたのかもしれない。後の預言者たちが奇妙な行動をすることで人々に訴えかけたように、人々が目の前に起こっていることの真相を、よくよく考える機会を提供したのかもしれない。誰の目にも留まる、決して見過ごし得ないものによって。

創世記 7:1-16

いよいよ洪水の始まりである。神は告げられたけれど、箱舟も造ったけれど、それでも半信半疑というのが、人間としては当

たり前の感覚ではないだろうか。誰も、この世界が減びていくのを待つような思いは持ちたくない。この時期のノアは、大きなストレスを抱えていたに違いない。私は、自分がそれに耐えられる自信はない。

5節の「主は彼の後ろの戸を閉ざされた」という一文に、強い印象を受ける。箱舟の扉を閉じたのは神である。もう誰も乗ることができない、その分岐点は神が定められる。人が勝手に決めるのではなく、だ。そしてまた、箱舟の中にいる者たちとしては、これほど安心なことはない。その行動は、この箱舟は大丈夫だという神からの確約であり、必ず守るという意思表示でもあるのだから。私たちの人生にも様々な扉があるけれど、それを閉じて先へ進めと言って下さるのは神ご自身なのだ。

創世記 7:17-28

洪水の範囲については、昔からあれこれと議論がなされている。世界にある洪水の跡と言われるものを見ると、文字通りに地球は水没したのだとも言えそうだ。また、

神の意図が人類を滅ぼすことにあった点を考えると、その時点で人類が住んでいた地域を水没させれば済む話で、とも言える。エデンの時点では、その範囲はごく限られていたのだから、ノアの時代でも広範囲になつていたかどうかはわからない。聖書の記述は、意図をもって書かれているから、5節を根拠に、水はエベレストよりも9メートル上まで届いたのだと計算するのは、あまり意味がない。考えるべきことはむしろ、神が徹底的に人類を滅ぼされたということだ。あの神が、あの慈愛に満ちた神が、それでもここまでなされた。人の罪の重さに寒気がする。ノアは箱舟の中で、うめいていたのだろうか。

創世記 8:1-14

水が引くのには、かなりの日数が必要とされている。ノアたちはじりじりして待っていたのだろうか。鳩がオリーブの葉を持ってきた時、すぐさま出ていきたいと思っただけではないだろうか。地上がどうなっているのかを、一日でも早く

確かめたいと考えても不思議ではない。だが、ノアたちは待ち続けている。箱舟の中に留まって、天蓋を外してからもなお、留まり続けている。神が「よし」と言うまでは。そう、この出来事はすべて、神の御手の中にあること。自分たちが箱舟で助かったこともまた神の御心のゆえ。だとすれば、最後の最後まで神に任せ、決して自分の勝手な思いで動き出したりしないこと。ノアの一家はそのことを、堅く心に刻みつけていたのだと思う。神の心割りも自分の都合を優先させるばかりの私たちは、彼らの待つ姿を理解できないかもしれないが。

創世記 8:15-20

神の命令が下った。ついに箱舟を出る。そこで最初にすることが、神への礼拝であつたと記されている。彼らは何を祈ったのだろうか。人類の罪か、神のなさったすさまじさへの畏怖か、あるいは戸惑いか。はたまた、これからの生活への不安だろうか。礼拝には様々な思いが持ち込まれる。でもそれで良いのだと思う。様々に思い、

様々に戸惑い、その全ての思いを傾けて、でも、神を礼拝し、神の確かさを仰ぐ。人にできることはそれだけなのだから。神の前に出て、神を仰ぐ時にこそ、どうすることもできない人の道は、しかし、神によって開かれ始めるのだ。

創世記 8:21-22

この言葉を忘れてはいけない。どのような災害に遭おうとも、それは決して、神が人を裁くためになしたものと思うべきではない。天災について、私たちがなすべきことは原因の究明ではなく、むしろ復興への志だ。そしてまた、神は必ず、ちゃんと日の巡りを取り戻して下さり、季節を回復して下さり、人々の暮らしを取り戻させて下さる。そう約束されていることを覚えておこう。この言葉は大切な慰めとなる。

22節にある「人の心の思い計ることは初めから悪であるから」という言葉は考えさせられる。神はご存じなのだ。洪水も刑罰も、それで人を変えことはできないし、助け出すこともできないことを。道はただ一

つ、刑罰や叱責ではなくて、キリストによる贖いのみ。それで初めて、人は神との和解を手にするのだ。9章からの語りを見ると、洪水はむしろ、再出発の時として指し示されているように思う。

創世記 9:1-7

血の滴るレアなステーキはだめか、という話ではない。神が注目しているのは「血」そのものではなくて、それが象徴している「いのち」である。いのちを与えたのは神ご自身。だから、そのいのちを左右する事柄は、神の主権のもとにおいてのみ認められる。人がどんなに理屈をこね、これには意味がある、必要性があると主張しようとも、その話筋が通つていようと、それだけではだめなのだ。当たり前である。いのちを掌握している方を抜きに話を進めても、何の意味もないのだから。後に、十戒においては殺人という罪が取り上げられていくけれど、ここにある9節の言葉こそ、いのちを取り扱う全ての行為にとつての原点とも言えるのではないか。畏怖というこ

とを忘れ去ってしまうならば、その時人は、自ら神のかたちとしての意義と価値を投げ捨ててしまうのだ。

創世記 9:8-17

雨上がりの虹は、ふと見上げただけでも、何とすがすがしい思いにさせられる。七色が見える仕組みはわかるし、人工的に作ることもできる。簡単なところでは、庭に散水することによってでも。それでも、何度見ても飽きず、心が満たされるような思いになるのは、この箇所を知っているからだろうか。西がこの時初めて出現したと考える必要性はない。神は大空にかかっている虹を指さして、それが頻繁に出るものだということを意識しつつ、「この虹を見るたびに、私の約束を思い出せ」と告げられたのだ。ここにある約束は、神のあわれみであり、祝福の印である。滅びさねばならないと神が決断なさるほどにひどかった人類、ノアだって、息子たちだって、実は例外ではない。だが神は、この人類に祝福を約束し、守りを約束し、忍耐と寛容を語り、そ

して虹を指し示される。しみじみ、ほっとさせられる。神の御許にあつてよかったと思う。雨の後は空を見上げて、神の約束を眺めたい。

創世記 9:18-29

ハムの行為は、つまりみつともない姿の父親を嘲笑したということである。父親の権威がどうのという話以前に、他の二人のように、父の醜態を覆ってあげるような優しさというか、大切に思う心がないというあたりが問われている。

だが、ノアもまた、何とまあ、という感じである。酒の是非は様々に言われるけれど、こういうことを見るとやはり、人はこの力に対して無力であることを思う。抵抗できないのならば、極力警戒して、自制する必要があるのは、他の様々なものと同じである。

神のあわれみによって救い出された一家であるが、そこにあるのは決して理想的な姿ではなかったことを、聖書は率直に書き記している。刑罰は完全な打開策ではない。

もちろん神はそのことをご存じでいらっしやる。

創世記 10:1-32

この箇所を詳細に分析するのも興味深いけれど、古来、ここに列挙されている諸民族の推移を把握している読者（または聞き手）は、はたしてどれだけいたかを思うと、いくつかの点に注目するに留めたほうが良さそうだ。

まず、ノアの子孫から諸民族が分かれ出たと記されているという点。聖書はノアの洪水を、単なる懲罰としてではなく、再起の機会として意識していることがわかる。次に、最初の権力者と呼ばれているニムロデ。権力者という言い方は、人間中心的な雰囲気を感じさせるが、でもここには「主のおかげで」と書いてあり、人間世界の権力もまた、神の下にあるということが指し示されている。ローマ12章などにもつながるだろう。もう一点。前の章でハムは「のろわれた」のだが、彼の子孫を見ると、壮麗な古代文明を築いた諸民族の名前が出て

くる。あの箇所を、民族同士の優劣の話として受け取るのは、聖書とはかけ離れたものと言えるだろう。

創世記 11:1-9

もしも人類が罪を犯さなかったら、今頃、どれだけ壮大な文明を築いていたことだろうか、と思うことがある。宇宙への進出も、ずっと早かったかもしれない。現実には、歴史を見ても分かるように、繰り返し、自らの手で停滞させ、あるいは衰退させている。戦争だけでなく、文明としての愚かさによっても。昨今の経済危機だって、人間の愚かな欲望から出たものであることは、しばしば語られているとおりである。

だが、残念ながらこれが人の姿だ。せつかくの英知を、神と対抗することを目的として浪費している。「天に届く」とは神への挑戦であり、神に匹敵することを誇示しようというものだ。神のようになれると言われて誘い込まれたエバを思い出す。だが、節にあるように、神からすればそれは「降りて」いかなければ見られないほどにちっ

ぽけなものに過ぎず、神に届く可能性などかけらも感じられない程度のものなのだが。

創世記 11:10-26

いよいよアブラハムへと向かう系譜が語られていく。個々の名前は、それほど有名というわけでもなく、強調点もない。ただ、数字には注目したい。5章にあった系譜と比べて、明らかに年数が減っている。それでもまだまだ長命であるが、最初の子が生まれた年齢はすでに、現代の私たちと同程度のものになっていることに気づかれるだろうか。後に見るように、アブラハムには子がなかった。5歳という年齢は、アダムたちの時代ならば、何も気にする必要のない程度のものだ。が、アブラハム自身の時代では、やはりこれは大きな意味を持っている。長命はそこそこに続いているけれど、人が本来神から与えられていたはずの生命力は失われつつあるようだ。そういう中で、新たに希望の星として登場するのが、アブラハムであり、彼に与えられる約束である。

創世記 11:27-32

32節には興味深いことが書いてある。カナンへの移住は、テラ自身の旅行計画に含まれていたのだとある。それがもともと神からの呼びかけに端を発するものなのか、テラ自身の意図であつたのかはわからない。テラは途中のハランで留まってしまった。文明の地から離れがたかったのか、それとも疲れてしまったのか。テラはハランの地で死んでいる。

とすれば、アブラハムにとって、カナンへの旅は、父の目指したところへの再出発ということにもなる。そのことを考えると、12章で神からの呼びかけを受け、アブラハムが「よし！」と腰を上げた時の思いは、訳も分からず不安で一杯というよりはむしろ、出かけるきっかけを失っていた者が、ちょうど良いタイミングで背中を押されたような感覚とも言えそうだ。何かのことで、途中で止まってしまふことはあるだろうが、神が声をかけられた時、よし、と歩き出せるならば、それこそが意味がある。

創世記 12:1-4

いよいよ、アブラハムの生涯に入る。昨日述べたように、カナンへの旅そのものはすでに始まっていたとも言えるのだけれど、神がアブラハム自身に対して呼びかけられたのは、やはりこの箇所だと聖書は告げる。そして、そこから神とアブラハムとの関係も始まった。

時に聖書を、人が神を尋ね求めた記録だと言う人があるけれど、正確を期すならば、それは違う。聖書はやはり、神が人に対して呼びかけられた記録であり、神が人を求めてこられた記録である。そして、神からの約束があり、祝福があつてそこから物事が動き出していく。何も持たない者たち、いや、捨てられて当然の者たちが、しかし、神の助けを受けていく。ローマ5章に出てくるこの関係は、聖書全体を貫いている。

神を親として考えるのは、適切などころもあるけれど、ちよつと違うところもある。親が子を助けるのは当然であろうが、でも、神が人を助けるのは当然ではなく、むしろ、「えつ、助けてくださるのですか、こんな

私たちを」と驚く思いを出発点としている方が妥当であろうかと思う。

創世記 12:5-9

カナンには到着したが、どこに居を構えるかで、しばらく迷っている。最初に来たのはシェケム。人はたくさん集まっていたが、それは日本風に言えば門前町のようなもの。神の約束に基づいて来てみたら、異教が栄えている場所に出会ったのだ。次のベテルとアイはいわゆる都市国家。帝国ではないけれど、人間の力が結集している姿であり、神の導きでやってきて出会ったのは、再び、人の勢力であつたことになる。

これは戸惑うだろう。せっかく約束の地に来て、以前のウルやハランと何も変わらないが光景が広がっていたのだ。でも、そうなのだと思う。神は決して、エデンの園を用意してくださっているわけではない。見るところは、何も変わりのない場所、神などいらないと言いつづけている人々の榮えている場所。でも、そこに神のおられるところがあり、神の支配があり、神の祝福が用

意されている。日本の状況を見て、神から遠く離れた状況だと嘆くことがあるけれど、神の国は決して、手厚く守られた別世界などではないことを知っておく必要がある。逆に言えば、それでもなお、ここに神の国はあり、なのだから。

創世記 12:10-20

赤っ恥、である。サラは確かにアブラハムの妹でもある。でも、妻であることは間違いない。それを人身御供として差し出すことにためらいを覚えていないアブラハムは、やはり当時の風習に影響されていた人間のひとりにすぎないということだろうか。人の弱さと愚かさと思う。

神の介入は、格別の恩寵と思うべきだ。そんなことは起こらない可能性もいくらでもある。せっかくの祝福を自らの手で台無しにしてしまう人の愚かさである。諸国民の父となると言われている人が、エジプトの王に叱られているのである。

それにしても、この結果、アブラハムは以前よりもはるかに豊かになった。ひどい

ことをして、それで財産を手に入れたのだ。もちろん彼は、しめしめなどとは思っていない。目の前にいる羊の群れを見ながら、彼は自らの愚かさ、神のあわれみの深さを思い知らされていたに違いない。

創世記 13:1-13

ロトは、アブラハムにとって身近にいる唯一の親類である。まだ子どもが生まれないう状況の中、あるいはロトに譲ろうかという思いもよぎっていたはずだ（5章では別の人が挙げられているが）。でも、財産が増えたために、二人は一緒に暮らすことができなくなってしまった。だから貧しいほうがいい、などとは言わない。神が祝福してくださった結果としての豊かさは、何も否定的に見る必要はない。彼らは良い解決策を見出した。同じ場所では土地が足りないのであれば、別々に住めばよいのである。この出来事を仲違いと見る必要はない。人には罪があり、悪がある。簡単には解消できない。だとしたら、できる限りの知恵を用いて被害を食い止めようとすることもま

た、神にある誠実さの一つではないか。アブラハムはロトに先に選ばせた。優しさでもあるが、どこへ行ったとしても神の確かな守りがあることを、ここまでの旅路の中でアブラハムはよくよく学んでいたのだとも思う。

創世記 13:10-13

ロトには土地の善し悪しを見る目があつたように、牧畜業を営む上での才覚もあつたのだろう。彼が選んだ土地は、確かに肥沃であつた。ただ、彼は見落としている。そこが人間自身にとってどういう環境であるのかを。羊のためには最良でも、人のためにも最良とは限らない。そういう場面で私たちは、何を大事に思い、何を選択するのかというのを問われることになる。そして時には、経済的な繁栄よりも優先すべき事柄があるのを、忘れてはならないのだ。禁欲や清貧が呼びかけられているわけではない。アブラハムは十分すぎるほどに豊かでもあつた。ただ、全く別の角度から物事を見る目をも、養っておかねばならない。

心の目をちゃんと開いて、見るべきものをしっかりと見られるように。

創世記 13:14-18

ようやく、定住できる場所が見つかった。神が用意してくださった場所、そういう印象が強い。そして神からの呼びかけがある。土地のこと、そして子孫のこと、この約束はこの場所で与えられているのだということ、聖書は語っている。ウルやハランで出発前にはなく、だ。アブラハムが心底、神を信頼し、確信していたのだと言うことがよくわかる。なお、これらの約束は、アブラハムの存命中はほとんど具体化していない。彼は約束の実現を見ることがなく、この世を去る。でも私たちは知っている。その約束が確かに実現したと言うことを。自分の目で確かめなければ、とよく言う。だが、限りある私たちに、はたして本当に確かめることなどできるのか。闇雲に信じ込むわけではないけれど、信頼して信ずる部分もある。それは神ご自身を信頼しているかどうかの話とも密接につながっているの

だ。

創世記 14:1-16

アブラハムはかなりの勢力を持っていたのだな、ということがわかる箇所だ。一つの町の王という感覚ではあっても、その連合軍を破ってしまうのだから。人数もさることながら、アブラハムのもとに結束した一団を形成していたと言うことか。この人の出来事は、孤独な老人がひっそりと暮らしていました、という雰囲気を読んでしまっているのではない。

戦いに出ていった理由は、甥のロトを救出するためである。アブラハムがどれほど彼のことを大事に思っていたのかがよく分かる。放っておけない、と思ったとたんに、彼は家来たちを連れて走り出してしまったということだ。彼は決して、ひなたぼっこをして余生を暮らしていたのではない。今の自分がなすべき業をきちんと見定めつつ、彼はどこまでも走り続けていたのだと言える。

創世記 14:17-24

ついでに助けたとは言え、アブラハムはソドムなどには関心がなかったようだ。関わりを持つことそのものを拒んでいる。神ご自身によって導かれて、孤立無援のようなどころから歩いてきたアブラハムにとっては、今さらソドムなどの王と懇意になる必要も、望みもなかった。彼の願いはロトの救出であって、それはもう果たされたのだから、それで十分ということである。

ただここに、シャレムの王メルキゼデクが登場する。この人についてはヘブル書において、キリストを説明する上で引き合いに出されている。もともと創世記はそんなに詳しく、彼のことを語っているわけではない。ただ、アブラハムは彼を神の祭司として認め、神への捧げ物を彼に託している。そういう仲介者の存在は、特に旧約には繰り返して出てきていて、しかも決して否定的ではない。誰かのために祈り、必死で取りなしをなすということは、とても重要なことだ。私たち一人一人が神から与えられている大切な存在意義なのだから、もう少し

この役割に熱心でありたいものだ。

創世記 15:1-7

神の約束にも関わらず、なかなか子どもは生まれなかった。こうなると疲れを覚え、戸惑いを感じ、神の御心がよく見えなくなるというのは、誰にでも起こりえることだ。だからこそ神は、アブラハムに語りかけて行かれる。毎日、毎日というわけではない。長い期間が空く場合もある。だが、ここぞという時に神からの呼びかけがあつて、アブラハムは再び、その信仰に生き続けることができていく。

どのような方法で呼びかけてこられるのかは、人それぞれ、場面によっても違う。だから、ちゃんと心の目を開いて、耳を開いて、あのサムエルのように言い続けているたい。「しもべは聞いております。主よ、お話しください」とである。

それにしても、アブラハムくらい、神との間で率直に語り合えるようになりたいものだ。もちろん、敬意は必要で、畏敬の念を忘れては困る。だが、私たちは遠慮しすぎ

ているのかもしれない。

創世記 15:8-21

間違えないでほしいが、アブラハムは呪術的なやり方をしているのではない。神はそのような類のことは激しく嫌われる。彼は単に、神を礼拝するための、捧げ物の用意をしているのだ。まあ、現代人にとって、壮麗な神殿で捧げられていた動物の血を見るだけでも卒倒するだろうから、違和感があるのは仕方がない。それから、猛禽とか暗黒の恐怖というのも、悪魔的な攻撃を意味しているわけではなく、単純に、獲物を見つけたどう猛な鳥たちがやってきただけである。とは言え、鋭いくちばしと爪を持つこれらの動物は、人々に不安と恐怖心を与えないではおかしいのも事実だ。それはつまり、人自身の内から出てくる恐れである。神にある平安を逃してしまつたら、もはや暗黒の恐怖しなくなってしまうのは当然の成り行きである。だからこそ、解決策もまた、神ご自身から発せられる言葉によってこそである。神はここでもアブラ

ハムに、約束をさらに積み重ねることで、励ましと勇気を与えておられる。

創世記 16:1-6

アブラハムは信仰の人であるが、信念の人というわけではなかったようだ。彼は時々迷い、脇道にそれていくとする。ここに出てくるハガルは、いわゆる愛人ではなく、浮気の類とも違う。彼女はあくまでも正妻であるサラの支配下にあり、その存在も、生まれてくる子も、サラに所属する。アブラハムの気持ちがどうの、という話ではないのだ。目的はただ一つ、子どもを、ということである。もっとも、それが良い方法ではなかったことは混迷した事態からもよくよくわかる。社会的に認知されている手段でも、真に良きこと、神に認められることとは限らないのだと、肝に銘じておきたい。

先に待ちきれなくなったのはサラである。だが、その案に同調したアブラハムもまた不安を覚えていたということだ。神の約束を否定したわけではない。けれど、その趣

旨を少し違うものにして、もっと確実、もっと現実的、自分の手も加えて、というふうにする。このくらいならばやりやすい。そうやって人は、御心とは別の方向へと進んでしまう。

創世記 16:7-16

この箇所を読んで、サラの心のなさを思うのも良いし、ハガルの態度について考えるのも良い。あるいはアブラハムの主体性のなさも考えさせられる。だが、それよりも注目させられるのは、神ご自身のなさり方だ。神はハガルに言う。「あなたの子孫を大いに増やす」と。そんな約束が与えられる理由はただ一つ、生まれてくる子もまたアブラハムの子であるからだ。神の意図された経緯ではなかった。人間たちにはたくさんの問題があった。神が与えた約束の、本来の形からはほど遠かった。それでも神は、「アブラハムの子」と呼ばれ得るその子に、同じ約束を与えておられる。神は約束を必ず実現なさるということは聖書で繰り返し告げられていることだが、このような

箇所を見ると、その約束を最も重く受け止めているのは、神ご自身であるのだと痛感する。そのような方が私たちに、救いの約束を与えてくださったことに、何よりも安堵を思う。

創世記 17:1-8

89 歳である。ということは、カナンに入った75歳から、すでに四半世紀が過ぎようとしているということだ。いろいろ迷いはあったけれど、今もなお、神の約束に耳を傾け続けているアブラハムは、やはりすごい。そしてまた、神の約束というものが実に遠大であることも、覚えておきたいものだ。神は決してその約束を忘れない。裏切ることもしない。その時が、まだまだ先だったとしても、である。

アブラハムの名前が変更されている。元のアブラムというのの良い名前で、「偉大な父」といった意味合いだが、今度は「諸国民の父」という意味合いになる。彼の存在が、彼自身あるいはその子どもたちだけではなく、人類全体に関わる重大なものである

ることが、この名前から指し示されている。個人主義が広がっているけれど、神の目はずっと幅広く、多くの人と関わるものとしての私たちを見ていることを、時には思い出したいものだ。

創世記 17:9-14

割礼については、後にパウロたちはだいぶ苦労した。ユダヤ人はこの儀式に固執して、これがなければ神との関係は成り立たないという感覚であつたからだ。でも、もともとの意味合いに立ち戻って考えてみると、少しずれていることに気がつくはずだ。これは、神との契約の印である。別の言い方をするならば、神が約束してくださった祝福について、「私はそれを信じて、期待して生きていきます」ということを表明するものである。つまり、信仰を表明する手段としての割礼である。もともと、割礼そのものに、何か特別な功績と言えるようなものがあるわけではない。「割礼という立派な行為をしたから、神から祝福してもらえ資格ができた」というような話ではない。

これは神の一方的な恵みを受け取りますという意思表示の手段。何も誇るような話ではないのだ。とすれば、である。キリストへの信仰を表明し、バプテスマ・洗礼によってそれを言い表した者たちにとって、このような印は、もはや必要がないというのは、ごく当然のはず。こだわるべきところを、人々は取り間違えていたのだ。

創世記 17:15-21

アブラハムに与えられた約束を継承するべき子どもは、サラから生まれる。もともとアブラハムはするように受け止めていた話であつたはずだ。だが、自分たちの年齢を考えると、さすがに戸惑わずにはいられなくなつていたのである。神に対する不信を抱いたわけではない。神の約束を信じていたし、それがどのような形かは分からなけれども、きっと良いようにしてくださるとは信頼していた。約束はイシュマエルによつて実現するということであつたのか、とも考えている。そういう結果になつたとしても、神が約束を破つたなどとはこれっ

ぼっちも思わない。アブラハムは十分に幸せであった。だから、笑ったと書かれているけれど、決して不信仰ではない。ただ、神の約束はもっと先にある。その結果はもっと驚くべきこと。神の約束を自分の思いで小さくして、勝手に満足しているだけではあまりにももつたいない。彼に用意されていたのは満足ではなく歓喜の叫びであったのだから。

創世記 17:22-27

割礼を受けたのが、アブラハムだけではなく、約束を継承する子ではないイシュマエルも含まれ、さらには家の者たち、ただの雇われ人ではなく（彼らには彼らの人生があり、信念がある）、奴隷とかのようにアブラハムの意志の下にある人々も含まれていたことは注目させられる。

神への信仰は、自分一人のものではないのだ。自分が良い関係を結んでいればそれで満足ではなく、他の人々と共に、共に生きる者たちが一緒に、そういう姿が見出される。個人主義ということが言われる。も

ちろん、個々人の自由は尊重されねばならない。強要しても意味はない。だが、本来あるべき姿としては、「共に」であるということ。ここを忘れてはいけないのだと思う。その願いを持ち、だからこそ、家族や仲間たちが共に神の前を歩める状況を前提として、日々の暮らしのあり方を形成していきたいものだ。

創世記 18:1-8

当時、旅人をもてなすことは、ともに生きている人々にとつて、自然な行動であったとされる。何しろ、今のように宿が発達していたわけではなく、もちろん、コンビニも自動販売機もない。飲み水一杯にしても、誰かの家に頼る以外にはなかったのだ。アブラハムは、その旅人が神であるとは気づいていなかった。彼はただ普通に、旅人をもてなしただけのつもりであった。でもそれが、神との幸いな語り哀の機会となっていたのだと、新約にも書かれている。現代の日本で、旅人をもてなすというやり方は、今ひとつ馴染みがない。旅人に

一夜の屋根を貸すというのも、なかなか難しい。でも、だから何もしなくていい、という話ではなく、自分にできること、自分たちの社会に適していることを探して、見知らぬ誰かのために手助けをするということとを、志していきたいものである。

創世記 18:9-15

サラが笑ったのを責めることはできないと思う。信じがたい話であり、それに、サラには目の前の人々、ただの旅人と思ったとしても不思議ではない。戯れ言、と思っってしまったのだろう。でも、どうやら、そう簡単に扱っていい人たちではないと気づいたから、恐ろしくなって震え上がったのだろう。

信じがたいと考えるサラはごくごく当たり前に常識的である。そんな愚にもつかないことを期待するほうが馬鹿げている。でも、もしもそこにおられるのが神であるなら、そして、神の約束の確かさということを繰り返し教えていただいているなら、きつと反応は違ったものになるはず。だから

ら、ちゃんとそこに神の約束があるかどうかを見極められるようにしよう。また、神の約束をしつかりと受け止めるための所作にも、普段から慣れ親しんでおこう。さもないと、せつかくの呼びかけを無駄にしかねない。

創世記 18:16-21

映画の中で、地球に小惑星が衝突して滅亡する、みたいな話が出てくると、最初にそれを知った主人公は、知らずにいたほうがずっと楽だったと、途中でうめくようになることが多いようだ。誰かの滅亡を知られるというのは、非常に重たいことだ。神がそうなさるのならば、それは神お一人でどうぞ、私は聞きたくない、と耳をふさぎたくなるかもしれない。この重荷を神と共に担えと求められるのは、あまりにも厳しい。

だからこそ神はおっしゃっている。アブラハムには隠しておくべきではないのだ、と。彼にはあえて、この重荷を担ってほしい、と。実は私たちも同じ立場に置かれて

いる。「全ての人は罪を犯した」との厳しい宣告を知らされている私たちはどうするか。アブラハムは必死の祈りへと進んだ。この重荷を、必死になって背負い始めたのである。聞かなかったことにするのでもなく、逃げ出すのでもなく。

創世記 18:22-33

アブラハムの祈りは何度も何度も繰り返されている。彼自身の言葉にも出ているように、それはしつこいと叱られても仕方のないほどのものだ。恐れ多くてこんな祈りはできない、と感じる人のほうが大多数なのではないか。アブラハムだって脳天気にはたみかけていたわけではない。彼がこのような祈りができた理由は、案じていたからである、必死の思いで。その町の人々を。そのような心を持っていることが、神がこの話をアブラハムにはするべきだとおっしゃった理由でもあり、神の心を共に持つということの意味合いだ。そして、ヨハネ15:15でキリストは弟子たちに、あなたがたには全てを伝えた、と語られている。そ

う、神はご自分を慕い求める者たちと共に歩み、思いを共有することを願っておられる。共に涙することを望んでおられる。

創世記 18:22-33 その2

この箇所は、もう少し考えてみよう。アブラハムは誰のことを思って、これだけの祈りをしたのだろうか。ソドムに住んでいたロトか。もちろんそれもあるはずだ。でも、ロトのことだけが心配だったら、彼だけは助け出してください、と願っても良かったはずだ。正しい者たちと一緒に滅ぼさないとということか。それもまた、彼らだけを救い出すという手段があり得た。でもアブラハムはその何人かのために町全体を赦してあげてほしいと願っている。彼は、神の判決の正しさを認めつつも、なお、その罪ある町が救われることを願っていたのだとしか言いようがない。

罪があることを認めつつも、それでもなお赦されていくことを願う。私たちはこのような思いがあることを知っている。そう、神ご自身の心。むしろアブラハムはそれを

意識して願っているわけではない。だめだと言われることを覚悟の上での祈りだ。でもやはり彼は、神と共にある人である。目の前の罪に対して、自分たちがどんな祈りをしているか、考えてみたい。

創世記 18:22-33 その3

もう一日だけ。アブラハムはなぜ10人までやめてしまったのか。10人でも良いと答えられた神は、ロト一人だったらだめ、とは言わなかったようにも思う。でも彼はやめた。そして、神はそれで良いと受け止めておられるように見える。

何かについて祈っていて、それが適ったわけではないのに、祈りをやめることがある。待ちきれなくて、あるいは神への失望からやめるという部類は別として、祈り終わるのが御心だと受け止めつつ終える場合がある。これは説明は難しい。だが、もしも神とちゃんと向き合い、ちゃんと語り合えているとしたら、祈り終わるべき時もまた、指し示されるのかもしれない。それが分からないうちは、祈り続けるほうが良い。

御心が見えないなら、祈っていたほうが良い。けれど、もしかすると神はどこかで、「もう十分、終わりにしなさい」と語りかけておられるのかもしれない。その可能性を考えさせられる、アブラハムの祈りの終わりである。

創世記 19:1-11

ロトの行為は混乱している。旅人をもてなした姿は良い。彼らを守ろうとしたのも良い。だが、娘を身代わりにするという感覚は、当時であつてもなおひどい。ロトはアブラハムのすぐそばにいて、神と共に生きることを目の当たりにしていたはずだ。彼はそこから多くの影響を受けている。だが同時に彼は、この世と調子を合わせることにためらいを感じていない。その場その場で切り抜けていけば良いということだろうか。神を軸とすることも、この世に浸ることもしない人。それはソドムと共に滅びることはなくても、決して光ある日々を歩んでいけるものとはなりえない。黙示録3章の「なまぬるい」と言われていた人々の

ことを思い出した。

創世記 19:12-14

ロトの婿たちの姿を考える。冗談としか受け止められないでいる姿。舅の言葉であるのに、である。ロトが必死の表情であることはよく分かっただろうに、である。大切な知らせを受け取っても、冗談としか受け止められない人がある。たいしたことはないと勝手に高をくくる人がある。チリ地震で発令された津波警報に、波が来ると言ってサーフィンに出かけた人は多く、それ以前に、避難勧告が出て動かなかった人が多かったと報じられていた。もし、自分が十分な情報を手にして、絶対に間違いない判断を下せるのであれば、他の人の言うことをどのように受け止めようが自由だ。でも、人はそんなに賢くはなく、まともな判断ができるわけでもない。せめて、信頼できる相手からの呼びかけは、冗談として片付けずに真剣に考えたい。そして神は私たちに、鋭く警告を発しておられるのだ。

創世記 19:15-22

神は実に忍耐強い方だ。ここまで来てなおためらっているロトを、無理やり引っ張ってでも助け出そうとしている。この後の出来事を考えると、ロトの妻も一緒に手をつかんで引っ張られていることには大いに注目したい。さらに、遠くまでは行き着けないとこねるロトの言葉にも、そのまま応じている（経緯からすれば、ロトが山にたどり着くまでは滅びは来ないと考えるのが当然なのだが）。

アブラハムが必死に祈った時とは別物の、ただのわがままであり、こねているだけのけれど、それでもなお、神はロトを助け出すことを第一に考えておられる。

神が厳しすぎるとか、杓子定規だとか言う人は、この場面を読み直すと良い。たぶん私なら、とうの昔に堪忍袋の緒が切れている。

創世記 19:23-29

この出来事は、多くの人々に衝撃的な印象を与えたのだろう。神の怒りといえば、いつもこの場面が取り上げられる。率直に言えば、この二つの町がどの程度悪かったのかについては、よく分からない。もっと悪い町もあるかもしれない。その判断は神の主権であり、状況も分からない者たちがあれこれ評価するものもあるまい。ただ、創世記が繰り返し告げているのは、これだけの刑罰が実行される場面なのに、神はたった一人の、今ひとつ、ろくでもない感じのするロトを救い出すことに、強く関わっておられるということだ。正しいことをする時には、多少の犠牲は仕方がないという言い方がよくされる。だが、神にとつてはそれは何の意味もないようだ。いかなる重大事のためであっても、神は一人の人を助け出すことについては、決して妥協なさらぬ。神のご性質を示す印の一つとして、しっかりと見ておきたいと思う。

創世記 19:30-38

ひどい話である。神はロトと娘たちを助

け出したけれども、彼ら自身は墮落の中にいるばかりである。目の前の問題を解決して、そういう意味で助け出すだけでは、何の解決にもなっていないことを思わせる。人が真に助かり、その人も、回りの人々も、この社会も変化を手に入れるためには、単なる問題解決ではなく、神ご自身との関わりの変化、つまり、新約聖書が言うところの「神との和解」が決定的に必要とされるのだ。神に立ち返り、神との関係を取り戻すのでなければ、一時しのぎでは何にもならないということである。イエスが生き返らせた人々も、それだけでは真の意味はない。いずれはまた、死を迎えるだけである。まことのいのちを手にするのでなければ、肉体のいのちをどれほど延ばしてみたところで何の意味もないのだと、痛感させられる。

創世記 20:1-18

今日はちよつと長いが、一気に読んでいただこう。同じような出来事が以前もあった。アブラハムは自分のしたことに恥じ

入ったはずである。そして今は、もう間もなくイサクが生まれるよと、はつきりと告げられている時期なのだ。それでも、アブラハムは同じことをした。

人には弱い部分があるのだと思う。その点を攻められると、どうにも堪えられなくなってしまう部分があるのだろう。だとしたら、よくよく警戒しておいた方がいい。アブラハムは、他の地に移り住もうとする、腰砕けになってしまう。カナンでは幾人もの王を前にしても、堂々としていたのに。それが弱さなら、近寄らないのが一番である。

ただ、神はあわれみ深い。ひどい事態にならないように、何度も、何度も支えてくださっている。幸いにしてアブラハムは、そんな神の呼びかけと働きかけを心からありがたいと思える姿勢を持っていた。それが何よりの救いなのだと思う。

創世記 21:1-7

待つということには二つの種類があると思う。一つは、どうなるかわからないけれ

ども、そういう希望を抱いて、そうなったらいいなあ、なつてほしいなあという願いの中で、待望し続けるというものだ。夢を抱くというふうにも言えるかもしれない。これもすばらしい。これがなかったら、人生は無味乾燥だろう。ただし、ただの夢を待ちすぎると、せつかくの時を無駄にするかもしれない。

聖書には、もう一つの待つ姿が語られている。それは神の約束が実現するのを待つというものだ。今度は、先が見えないままに待っているのとは違う。必ずと宣言された神がおられて、その神を信頼するかどうかの話である。物事が難しいかどうかは、この場合あまり関係がない。神は全能だから不可能はない。問われるのはただ、神にはその気があるかどうか、裏切ったりしないかどうか、信頼できる方かどうか、そこに焦点はある。

そして、だからこそアブラハムは信じ続けた。時に迷い、もつと別の方法でと考え、行動し、それでも最後は神の約束に戻ってきて、そしてついに息子が、イサクが生まれた。歓喜の笑いがこの夫婦を包んでいる。

創世記 21:8-21

神の祝福があると、それを混乱の種にするという事態が起こる。残念だが、それが人間の罪深さだ。待望の息子が生まれたのである。多少のことがあったとしても、それを受け止める心の余裕をサラは持ち得なかったのか。同じことが頻繁にこの社会にはあることを自覚し、その波に流されないように、必死で立ち続けねばなるまい。

アブラハムは、結果的にはイシュマエルを家から出した。でも、今回は悩んでいる。そして、神の導きの中で決断をしている。以前のような曖昧さと逃げは、今度は見られない。様々な失敗と混乱はある。全てを防ぐことはできない。だとしたら、神にある解決を求めていきたいと思う。それがどのような道筋を指し示すものであったとしても。神はハガルとイシュマエルの母子を守ってくださっている。後にイシュマエルは、アブラハムの埋葬に立ち会っている。

創世記 21:22-34

アブラハムは以前からアビメレクを恐れていた。20章では偽りまで口にして、関係を悪化させないようにと必死であった。だが今、アビメレクのほうからアブラハムに和議を求めてきている。アブラハムの勢力がそれだけ大きくなっていったということだが、もう一つ、アビメレクは興味深いことを言っている。「あなたが何をしても、神はあなたとともにいる」。神があなたの味方になっっている以上は、どうがんばっても太刀打ちできるはずがない。無理な挑戦をするつもりはない。ここは平和にいきましよう、ということである。むしろ、アビメレクはアブラハムのそばに神の姿を見たわけではない。でも、アブラハムの言動と信仰姿勢、その全体を通して彼は確信しているのだ。こんなふうにして他の人から見られることができるとしたら、こんなに幸いなことはない。アブラハム自身も、神が共にいるということの重大さを痛感したに違いない。

創世記 22:1-5

試練と書かれている。アブラハムにとつ

て、この命令は意図が全く見えなかったに違いない。我が子の生命を奪うのか、ということへの感覚は、もしかすると現代とは違うかもしれない。徳川家康も長男を信長の意に沿って長男を死に至らしめたと言う。だが、アブラハムの場合、もう一つ、イサクが神の約束を継承する・実現する大事な存在であるということもある。ヘブル11章はその点に注目しているが、今ここで、この息子が死んでしまったら、いや、殺してしまったら、あなたの子孫は増え広がるという神の約束を、自らの手で葬り去ることになるはず。だが、創世記はアブラハムの心境を語らず、彼がすぐさま出かけていったことだけを伝えている。そこに私たちは、この子は神から与えられたものだ、ということを確認に意識しているアブラハムの心を見ることができ。「主は与え、主は取られる」と言ったのはヨブだが、理解したい事態の中だからこそ、それでもこれは神の関わっておられることだと知り得るかどうかは、大きな違いになるだろう。

創世記 22:6-8

イサクの問いかけは、アブラハムの心を鋭く貫いたに違いない。イサクはもつともな疑問を示した。いけにえを捧げに行くのに、捧げるべき動物がいらない。それは奇妙な行動である。もちろんアブラハムは明確な答えを知っている。だが、さすがに今ここで「お前がいけにえになるのだ」とは言い難かったに違いない。当たり前である。

しかし、アブラハムの答えはごまかしに見えるかもしれないけれど、これは真実でもある。イサクは神が与えてくださった子であるのだから。そして、後にこの言葉は、全く別の意味合いで、そのまま真実となる。「神ご自身が備えてくださる」という、ぎりぎりのところで吐き出された言葉は、しかし、この事件全体の最も大切な礎となっていく(14節)。神の前に生きる信仰は、きれいに整える必要などないのだろう。ぎりぎりのところで、うめくようにして、しかし、そこに真実は備えられていくのだと信じたい。

創世記 22:9

この時、イサクが何歳であったのかは不明だ。けれど、幼児ではなかったはずで、100歳を越えていたアブラハムの手から逃れようとすれば、たやすいことだったに違いない。けれど、イサクはされるままにしている。父への信頼と、神への信頼の深さを思う。あるいは天然記念物のようだと感じるかもしれないが、人と人が神の前に心を通わせていることの宝石のような輝きを見る思いである。

疑心暗鬼と混乱と反発が当たり前になってしまい、信頼という言葉が失われていく世界にあつて、私たちはただ、自分の手と目と耳と、心、自分の理解によって判別し、確かめなければ、何事も留保したまま、あるいはそっぽを向いたまま、というのが普通になってしまっている。あるいはその正反対に、全ての判断を放棄して、言われるままになっていたり。真に頼ることのできる相手を見定めることと、その方の言葉だけは信頼するぞという決意と、そういうあり方こそ私たちがまともに歩み進んでいく

ためにはどうしても必要なことであるのに、何としても気づきたいと思う。

創世記 22:10-12

率直なところ、神がどうしてアブラハムにこのような試練を与えたのか、よく分からない。アブラハムの信仰に不信感を抱いていたはずはなく、アブラハムが神よりも我が子を優先していたということでもあるまい。口の悪い人なら、神にからかわれたのだと言うかもしれない、そのくらい不可思議な命令であつたと思う。聖書は、神の意図については何も語っていない。説明も弁明もしていない。ここにあるのはただ、神の言葉に従ったアブラハムの姿のみである。それでも神を信じる、ということを行動をもつて示した、アブラハムの心が語られるのみである。だから私たちは、その心を見て、自分と神との関わりを思い、そして、神に従ふことの意味を思い巡らしていたいと思う。

ひとつだけ留意点を。ここを読んで、自分に同じことができるだろうか戸惑う必

要はない。アブラハムと同じように子どもをささげよと求められた人は、聖書の中で、ほかに一人もいないのだから。

創世記 22:13-14

アドナイ・イルエと彫り込まれた額を持つている。主は備えてくださる、という意味で、私たちの信仰のあり方を示す、意義深い言葉だと思う。信仰は、私たちが何をしたか、どう貢献できたか、どれだけ努力して、犠牲を払って、ということではない。信仰とは、神が備えてくださるものを知り、それを受け取り、それに応答して、それを信頼することである。この事件は、「主が備えてくださる」ということで幕を閉じるが、これ以外の結末はないのだとも思う。キリストの救いも、新しいのちも、すべては主が備えてくださるもの。私たちの日々においても同じであることを、ぜひとも見出していきたいものだと思う。

創世記 22:15-24

神からの約束は、決して目新しいものではない。すでに告げられていたこと。いや、それでいいのと思う。神は何かの条件をつけて、これこれをすればこんな祝福が、と言っているわけではない。救いは恵みによるもの。だが、だからこそその約束が折に触れ、繰り返し、繰り返し、告げられていくのだ。私たちは忘れやすいものだから、環境の変化に動揺しやすいものだから、だから神は、何度でも語られる。私たちが主を信じて歩み進んでいくようになるために。

創世記 23:1-20

神が「この土地を全て与える」と約束されたところで、アブラハムが最初に対外的にも自分のものとした土地は、サラを葬るための場所であった。そして、彼が存命中に、いや、エジプトから戻ってくるまで、ここだけが一族の所有地と言える場所だった。

死者の葬り方は、時代や地域によって、風習は様々である。ヤコブやヨセフは、滞在していたエジプトの風習を利用してミイ

ラにされている。だから手法は多様でも良い。けれど、聖書は一貫して、死者に対する敬意と、遺骸は丁重に扱うのだということとを語っている。むしろ、死者を神のように扱うことはしない。しかし、神が与えてくださった生命であり、その器であった肉体を各時代の風習において、ふさわしく葬っていくことは、少なくとも聖書に登場する人々の基本姿勢であった。その意識だけは、今の私たちもまた、大切にしていくなべきだろう。

創世記 23:13

アブラハムは墓地を手に入れる際、代金を支払ったのだということが、詳しく記録されている。このやりとりが、単なる当時の風習に過ぎないとしたら（支払うのだということはお互いに了解しているても、こういうやりとりをする習慣だということであるのなら）、ここまで綿密に書いたかどうか。聖書は文化人類学的関心で記録しているわけではないのだから。

やはり、おおらかに差し上げますと申し

出られたにも関わらず、きちんと支払ったのだということに注目すべきだろう。アブラハムは神の約束を知りつつも、いや、だからこそなおさら、慎重であったのだ。神の祝福は決して他者と衝突して実現されるものではない。神が与えるつもりなら、何も他者から奪う必要などない。そんなやり方は手元に何も持たない貧相な君主か、あるいはけちな暴君くらいしかない。神の名を借りて他者から奪うことをする者たちは、神の御心に真つ向から反していることを自覚すべきだろう。

創世記 25:1-6

息子イサクの妻を迎えるにあたり、アブラハムはカナン出身の女性ではなく、彼の生まれ故郷から連れてくるという選択をしている。後にイサクも、息子ヤコブに対して、カナンの女性ではなくということを書いて渡している。

これは人種・民族的な区別、差別ということではなく、同じ価値観を抱いて歩んでいけるかどうか、ということを重視した判

断だ。厳密な話をするならば、故郷の女性ならば大丈夫とは言えない。そのことは、命じられた僕も理解していて、だからリベカが選ばれた時には、民族云々だけではなくて、その点において共通する土台を持ち得る相手かどうか注目されている。後々まで、旧約は結婚相手という点については重視し続けている。その様子は頑迷に感じる人もあるかもしれないが、でも、価値観の共有という点については、少なくとも神は決して譲っていないことを、私たちは心しておく必要がある。なお、民族は違えども価値観が同じであれば幸いとなることは、ルツの例に見られることである。

創世記 24:2

息子の結婚という一大事を、アブラハムは僕の一人に託している。この様子からして、連れ帰ってから改めてアブラハムが審査して、という話ではない。それほどにアブラハムはこの人物を信頼し、期待していたのということが分かる。

主人と僕と言うと、全く別世界の人とい

う印象が持たれやすい。だが、聖書が語るのは社会の仕組みとか役割の違いであって、時に家族以上のつながりが持ち得るものとしての関係だ。私たちは単に立場とか仕組みのほうにばかり目を奪われて、真実にその相手自身がどのような意義を持っているの、幸いの人になり得るのかどうかについて、ほとんど何も見ていないということがあるのを、自戒させられる。そしてもちろん、この僕は役目を立派に果たしたのだ。

創世記 24:10-14

らくだにも水を飲ませるといふのは、かなり大変なことだ。一回に80リットルは飲むらしいので、10頭いたから800リットル。灯油のポリ容器が20リットルということ、5個分である。もちろん水道があるわけではなく、おそらく螺旋状に掘り下げられた井戸を降りていって、水をくんで登ってきて、の繰り返しということだ。これだけの苦労を嫌な顔一つしないですてくれるとすれば（あくまでも善意である）、きっとイサクの良き妻になるだろうと、期待もで

きる。いや、ただの妻ではない。アブラハムの大所帯を切り盛りする女主人としての資質も見定める必要があった。そしてもちろん、心根の良さが問われている。

でも、これこれの資質が必要で、これこれの試験に合格すれば、という話ではない。この僕が良き試験管であったということではない。彼は祈っている。良き人に出会わせてくださいと祈り、神の導きを知るための方法として、これこれの槍会をさせてください、と願ったのだ。いわば、かなり無茶な話を設定して、それでも応じてくれる人が出てくるとすれば、それこそ神の指し示してくださいと人、ということだ。彼は神からの印を求めたのである。彼が求めたのは、神ご自身の差し示しであり、それ以外に、確かな相手を見いだし得る道筋はないと、神を信頼したことこそが、この出来事の意味合いである。

創世記 24:15-27

現れたリベカの美しさが語られているが、サラも86歳にして求婚されるほどであっ

たことを思うと、アブラハムの一家に関わる人々は、なかなか器量よしであるのだなと思う。が、それよりも重視されているのは、彼女の言動であり、人柄である。昨日も書いたように、とてつもない労力を見知らぬ人のために費やしたのである。もちろん、見返りなど考えることもなく、である。それはまさに、良き妻の選択にかなっている。箴言31章の「しっかりとした妻」の話にも通ずるリベカの姿である。

でも、これはやはり、神の導きを強く意識させられる出来事だ。何しろ、祈ったとたんによつてきたのがリベカであり、しかも彼女はアブラハムの親類に当たる。甥の娘であるから、イサクにとっては5親等だろうか。適度に離れていて、しかし、同じ文化的背景を持ち得る相手である。結婚においては、同じ価値観、それも何を善とし、何を悪とするか、価値基準というものが共通していないとやっかいだ。性格とか趣味趣向の違いは、互いの理解によつても乗り越えられるけれど、物事を判断する出発点は別だ。厳密に言えば、リベカの一家はアブラハム一家が持っていた「主なる神だけ」

という意識には至っていなかったようだけれど、神を畏れることを知っていたからこそ、そのかみが「私だけ」とおっしゃるならばそれに従う、という意識を持ち得たと言える。そして僕は、神の導きを見定めようとしている。

創世記 24:28-49

現代の常識に慣れていると、この話は奇妙に思えるだろうが、当時の結婚はあくまでも親の問題である。つまり、「結婚してください」と頼むのではなく、「娘さんを下さい」と父親に願うことになる。むろんここではリベカの気持ちを無視して、という話ではないのだが（ちゃんとリベカにまず贈り物をしている）、決定権は父のラバン。だから、より詳しく、丁寧に、このしもべは話をしている。彼が注意深く語った大事な点は、これがアブラハムの意志であること、カナンに連れて行く必要があること、そして、神の導きがあつての話であること、この3点である。

神の御心だと確信しました、というだけ

で、後は回りの人の思いなど無視して、一人で突っ走る人があるけれど、それは聖書の語る姿とは違う。人々の思いだけで動き、御心を振り返るのを忘れているのもまた同様であるが。この長い口上を、ちゃんと読んでおきたい。

創世記 24:50-61

ここで兄のラバンが出てきているのは、おそらく父のベトエルはすでに年老いて、家督を譲っていたからだろう。それにしても、彼らの応じ方はすつきりしている。「主から出たことですから」、それなら何も言うことはないと彼らは語る。神への畏敬の念というものを、現代人は激しく見失つてしまっていることを痛感する。彼ら、必ずしもアブラハムの信仰と同じではない。それでもなお、神のなさることであれば従う、と言い切る姿は、私たちの中にはたして見出し得るのだろうか。

こんな彼らだからこそ、即座に出発するという話でも、リベカの思いを尊重しようという姿勢を見せ、そしてまた、彼女の意

志をすぐさま受け入れたのだと思う。神の前に心が柔らかである者は、人との関わり、物事との関わりにおいても、柔らかな心を持ち得るようだ。

創世記 24:62-67

旅は成功した。彼を信頼して委ねたアブラハムの決断が正しかったということでもある。それはひたすら、神を恐れ敬う心になしえた事柄であつたのを、この二人は痛感していたに違いない。イサクとリベカ、当事者二人も互いを気に入つた様子である。この結婚は豊かな祝福の中で始まつた。後に、大きな混乱が待っているとは誰も知らないままに、である。

一つだけ気になるのは、イサクが「母亡き後の慰めを得た」と書かれている一言だ。聖書にはいわゆるマザコン的なことはまず出てこない。母への親しみはむしろ、親への敬愛の心として推奨されている。言い換えれば、当時、親を容易に捨てる人々が多かったということだが。ただ、この言い方は気になる。そして創世記11章では、「人は

父母を離れて」結婚に至るのだとある。家族は大事だが、その家族に捕らわれすぎるのは、別の混乱を招く場合もあるのだ。

創世記 25:1-11

アブラハムがさらに子どもをもうけたことから、神はイサクの誕生において、受精そのものを操作されたのではなく、アブラハムの身体そのものを整えられた結果として与えられたものであつたことに気づかせられる。神は奇跡を行われるが、同時に、この世界の様々な法則などの秩序をかき乱すおつもりではないようでもある。できれば、神の御業の全体に目を向けていくようにしたいものだ。

アブラハムは、イシュマエルのことですくんだようであり、後から生まれてきた子たちについては、きちんと対処をして、イサクの継承権に混乱がないようにしている。そういうしつかりとした姿勢が、イシュマエルとの関係も回復したのだろうか。アブラハムの埋葬は、イサクとイシュマエルの手でなされたということが記されており、

彼の生涯をととても良い形で締めくくるものとなつている。

創世記 25:12-18

イシュマエルは、神の約束によつて生まれた子ではなく、アブラハムの約束を継承する子どもではない。とすれば、「大いなる国民に」という約束の対象外だと言われても不思議ではないはずだ。けれど、神はイシュマエルについても、一つの国民へと広がっていくことを約束なさり、それが実現していく様子がここには書かれている。

一つの国民となるというのは、時代が過ぎる中で子孫がおのずと増えていく、というのとは意味が違う。そこには独自の意識があり、思想があり、文化があり、信仰があつて、それで他のものに混じり合わないで、独自の存在が生み出されていく。イシュマエルの場合、それはアブラハム一族とは異なつたものではあつたのだが、神は彼らに与えた約束を守られている。主なる神は、いわゆるキリスト教信仰者だけの神ではなく、全人類の神であることを改めて考えさ

せられる。

創世記 25:19-26

親たちと同様に、イサクの家庭も子どもの誕生という課題を抱えていた。彼らは子孫の繁栄という神からの約束を手においていたわけだが、それがどう影響しただろうかと考えさせられる。約束があるのだから必ず生まれる、と信じていたのか。それとも、約束を担っている者として、ここで血統を絶えさせるわけには行かないとプレッシャーになっていたのか。約束でなくても、神から何らかの使命を与えられている場合も、似たような局面に立たされる。神が命じられたのだから必ずなると確信するか、果たさねばならないと必死になるか。イサクは、望ましい行動を取ったようだ。そう、祈るということ。つまり、神に委ね、神に期待し、この事態を神に関わってもらおうとすることである。その結果がどうなるのだとしても、これ以外に道はないことを思わせられる。

創世記 25:22-23

後にリベカがヤコブの肩を持ち、後継者争いを引き起こしていくのは、お気に入り息子ということだけではなく、この預言があつたからだと考えられる。神からの言葉であるのだから、その意味合いは重要である。ただ、彼女は忘れていた。もしそれが神の御心であるのなら、不適切な策を講じなくてもことは進むはずだ。神の業を、しかし、人の手で動かさねばならないと思ひ込んでいる姿がそこにはある。と同時に、この話を、どうやらリベカは夫のイサクに伝えていないようである。イサクが神からの明確な言葉を無視してエサウを後継者にと願うとは考えにくい。その理由が何であれ、大切な情報共有がなかつたことが、後に家庭の混乱を招くことになっている点は、心しておきたい。せっかく神が関わってくださっているのに、人がそれを台無しにすることもあるのだ。

創世記 25:27-34

ヤコブが虎視眈々と後継者の座を狙っていたことがわかる。双子故になおさら、どうして自分が後ろに立たねばならないのかという不満もあつたのだろう。一方のエサウは、目の前のことだけで生きている人であつたようで、だから、このような事件にもなつた。彼は長子の権利というものについて全く関心を払っていない。後で憤慨するのだけれど、でも彼自身がそれで良いと言つたことでもあるのだ。この話を前提にすれば、後にエサウが祝福の祈りを受け取るうとすることもまた、本来、その権利はないこと、と言えるのかもしれない。画策するヤコブと思慮のないエサウ、どちらも混乱して、事態は悪化していく。その中で神がヤコブを選ばれたことを考える時、神の選びというものが決して相手の状態を検証した結果としてではなく、ご自身の一方的な決断であることを思わせられる。このことは、聖書全体に見られる選びの話にも関連してくるものと言えよう。

創世記 26:1-5

エジプトは大国であり、飢饉のような時には、大樹に寄り添う方が安心ではある。

けれど、相手が大きいと言うことは、その中に組み込まれてしまうという可能性を大きくする。だからこそ神は、アブラハムをメソポタミアから引き出して、カナンという別天地に移されたのでもある。後のヨセフ時代のように、エジプトに住むことそのものが悪というわけではない。だが、それにはかなりの覚悟が必要で、我が身を律していかなければならない。とは言え、カナンに留まれば大丈夫というわけではないことは、この後の出来事の中に見ることができ。結局、場所によって左右されるのではなく、自らのあり方、心の姿勢、そして神への信頼の度合いが物事に影響を与えるのだ。

創世記 26:6-11

どこかで見たような出来事である。そう、父親のアブラハムが、エジプトで、そしてまたこのゲラルの地でした失敗と同じ出来事である。悲しいことに、こういう面は親子で似る場合があるようだ。いや、そうい

う影響を受けやすいということだろうか。むしろ、逆に現れる場合もあるので、一概には言えないのだが。

恐れは人を間違った道に進ませることが多い。神ご自身への恐怖心ですら、しばしば人々を愚かにさせるといことが聖書には出てくる。畏敬という意味合いでの恐れ、畏怖は必要である。けれど、間違った恐怖心は、それがどのような相手に対するものであれ、人を過ちへと引きずり込むことが多い。神が味方なら誰を恐れようか、という信仰を、きちんと持ち続けていたいし、繰り返し確かめておきたいものだ。

創世記 26:12-25

水の出る井戸は、この地域では最も貴重な礎である。家畜がふえれば、それだけ水の確保も難しくなるわけで、近隣とのトラブルも増える。イサクは繰り返し、地域の民との争いに直面していたが、それは彼が豊かになっていったことの印でもあったのだ。混乱したこの世にある限りは、神のくださる幸いにも、しばしば困難が伴うこと

があることを、忘れないでいる必要がある。

この時のイサクは、賢く対処したようである。彼は徹底的に争うことをせず、自分が他の場所に移ってい。それも繰り返し。軟弱と思うか。だが、我を通せば解決するものでもない。この時のイサクには十分な力があつたことも、彼が回避を選択した背景にはあるだろう。彼には負担を引き受けるだけの力が備えられていたのだ。どこで譲り、どこで譲らないのか。この見極めは大切な知恵である。

創世記 26:26-33

イサクの回避策は、功を奏した。対立していた人々のほうから和解を求めてきたのだ。もし、抗戦していたら、こうはならなかっただろう。イサクにとって必要なのは、一つや二つの井戸ではなくて、この地に安心して暮らしていけるようになることだったから、本当に大事なものを手に入れることができたのである。柔和とか寛容は、聖書の語る美德である。もちろん、正義とか真実も大切である。だからこそ、どこで何

を發揮するのかについて、主の御心をしっかりと受け止めていきたいものだ。

平和を手にした時、イサクは井戸も手に入れている。神の祝福の豊かさというものを考えさせられる。私たちはあまりにも目の前のことにばかり心を奪われているのかもしれない。

創世記 26:34-35

エサウは、さほど考えもなく、身近にいた人々の中から妻をめとったのだろう。彼の生き様からしても、強い信念があつて、ヘテ人との結婚を望んだとは思われない。単純に好きだったから、あるいは気に入ったからという、純朴なものとも言える。だが、事態は混乱した。イサクたちにとって悩みの種、と書いてあるのは、気に入らないとか、性格がどうの、ということではない。それは、アブラハムに与えられた神の約束を継承する家族にとつて欠かせない、まさに心の姿勢、神と向き合う姿勢において違和感があつたということだ。ヘテ人だからだめ、ということではない。民族を越

えて、神への思いは共有し得る。だが、彼女たちにはそれがなかった。いや彼女たちの問題ではない。エサウ自身が、そういう点を大事だと考えていなかったということである。結婚において、家族の形成において、心の姿勢がどのようなほうへ向かつているのかは深刻な話だと、聖書は語っている。

創世記 27:1-4

イサクはエサウを好んでいた。25:28ではエサウの猟の獲物がお気に入りだったと書いてあるが、食べ物の問題だけではあるまい。奔放に生きているエサウの姿を好ましいと思っていたからであろう。結婚についても、当初は認めていたはずで（当時、父親の承諾なしに結婚など考えられない）、後になってから問題に気づいたということだ。

どういう性質の息子を好きになろうが、それは自由である。心に注目したとしても、この時点のヤコブをエサウより良いと言える要素は見あたらない。ただ、後継者の問

題はイサクの好みではなく、神との関わりの話だ。人間の好き勝手な選択では済まない。神が誰を選び、誰に託していこうとなるのか、それを指し示されてこそである。だが、この時のイサクには、神の御心を求め求める様子が見られない。約束の継承者という大事を、彼は個人的なものにしてしまっている。

創世記 27:5-17

父をだましたヤコブと言われるのだが、主導権を握っていたのは母親のリベカであつたことがよく分かる。洩る息子を叱咤激励して、悪知恵もつけて、全てを整えて、そうして夫をだましたのである。

リベカがヤコブを推した理由は、お気に入りの息子ということが一つ（25:28）、と同時にやはり、25章に出てくる神からのお告げが関係しているはずだ。エサウの結婚に見られる価値観や姿勢も気になっていただろう。でも、だとするならば、彼女は夫のイサクに言うべきであつた。それは違ふ、と。神のお告げがあると知っていたのなら、

それは大事な情報であつたはず。でも彼女は何も伝えていないようだ。神の心を訪ねようとしなかったイサク同様、リベカもまた、神の御心にこそ価値を見るのではなく、それは材料の一つでしかない。

この二人の姿勢が、この家族に決定的なダメージをもたらしてしまう。リベカは最愛の息子と、間もなく生涯の別れを余儀なくされる。

創世記 27:18-25

父をたぶらかすヤコブの様子は、冷や汗で大変なことになっていただろう、と想像できるようなものだ。それにしても、お気に入りだったはずの料理の味が判別できず、人間の毛深さと山羊の毛皮の違いが分からず、それでも声の違いには気づいているあたり、イサクはすでに大切なことを決断するだけの資質を失いつつあったのだな、と思わせられる。だとしたら、手助けを求めれば良い。リベカに、あるいはアブラハムがそうしたように、信頼できる家来に。彼の有り様は、神の前に誠実に事を運んでい

こうとする慎重さ、真剣さとは遙か遠いものだ。もちろん、ヤコブの行動は何一つ弁解の余地はない。だが私はむしろ、イサクの姿に啞然とさせられる。彼はそれほど「悪事」を働いた人ではないけれど、神への真剣さ、必死さにおいては、父アブラハムとは比べものにならない。

創世記 27:26-29

この祈りからは、アブラハムに与えられた約束は見えてこない。もちろん、こういう祝福もすばらしいものであるし、必要なことではある。神は豊かに祝して下さるだろう。それでも、本来アブラハムが神によって選ばれ、イスラエルが神の民とされていく意義が、ここからは感じられない。聖書には、イサク自身がアブラハムから祝福の祈りをしてもらっている光景は出てこない。あるいはこの行為は、その地域の風習から影響されたものなのだろうか。

誰かの幸いを祈り願うことはとても良いことだ。ただ、そこで終わってしまうのは、せつかくの祈りとしてはもったいない。☺

節の言葉は、後にヨセフが見た夢を思い起こさせるが、あのときもまた、単に兄弟の上に立つということではなく、この人を通して神の祝福があるという意味であつたことが、後に明らかになるのだが。自分たちの狭い了見で物事を受け止めていると、神の幸いの豊かさを見失ってしまうようだ。

創世記 27:30-40

あまりにも杓子定規な扱いになっていることに違和感を覚える。ヤコブが約束の継承者になることが神の御心であつたにしても、彼のやり方が不適切であつたことは明らかで、それなのに祈りが有効というのは、何だか神への祈りではなく、まじないか何かのようである。☹節の言葉はもつとも、ヤコブを祝福したからといって、どうしてエサウへの祝福を祈り願うことが不可能になるのか。聖書の中でそのような話はほかに出てこないはずだ。これもまた、当時の風習に影響されているのだろうか。もともと、約束の継承者ということの意味を取り違えてしまっているがゆえに、事態は混乱

している。神の祝福、神の幸い、神によって選ばれているということの意味を、よくよく見定めていく必要がある。今日、クリスチャンが神の民と呼ばれていることの意味についても。さもないと、争いと混乱を引き起こすだけになってしまうだろうから。

創世記 27:41-46

ヤコブもほめられたものではないが、エサウの問題性もまた明らかである。自分の思い通りにならないと激しく怒る様子は、神の御心は何かということについての関心の薄さを示すようだ。もつとも彼の場合、この祝福を逃したことを後々まで引きずりはしなかったようで、結局は神とは関係なく自分の世界を築いていこうとしているのだ。

リベカの問題性も再び出てきている。彼女は夫のイサクに真実を告げようとし、ない、というふうである。だがそれは、最愛の息子と二度と会えない事態を招くのだが。なお、エサウの言葉にも関わらず、イサク

は長生きする。後にヤコブが戻ってきたときにも、イサクは生きながらえているのだから、人の思い込みは全く当てにならない。

創世記 28:1-5

イサクの選択が、自分自身の経験を元にしていることは明らかだ。ただ、そこにはアブラハムの時のような信仰の選択は見られないように思う。アブラハムは絶対者たる神を意識する人々が多い地域で息子の結婚相手を探そうということは考えたが、はたして誰がふさわしいのか、また、その地にいるかどうかも含めて、あくまでも神の導き次第だと考えていた。でもイサクは、ラバンの娘ならばそれでいい、というふうであって、似ているようで、ずいぶんと違う。実際、ラバンの娘たちが信仰的であったかどうかは、かなり曖昧なところがある。彼の思慮の浅さは、ヤコブが大いに苦労するという結果を招くことになっている。その事態を神が用いて、ヤコブの訓練に益するものとしてくださったことは、ただ神のあわれみでしかない。

創世記 28:6-9

何が良いことであるのかを、自分自身の問題として探し求めようとしなければ、こういう行動になるのだろう。この結婚は、親の気に入るように、ということに過ぎず、前の妻たちの問題性をエサウ自身が意識したわけでもなく、また、その結婚そのものの反省からのものでもない。だから、当然のことながら、何の解決にもなっていない。

あるいは、姑息なヤコブよりも、からつとしたエサウのほうが好き、という人はいらだろう。聖書もヤコブについては決してほめていない。でも、エサウのような無頓着さ、物事の善し悪しに本気で向き合うことのない姿勢は、神の前には認めがたいのだ。これを善悪とか、神に対する思いではなく、異性に対する合いに置き換えてみるとよく分かるだろう。その場限りの好意、次に会ったときにはすでに他の人に移っているかもしれない、親の機嫌を取るために都合の良さそうな相手が選ばれ。どんなに他

の部分で魅力的な人であったとしても、これでは真剣な愛情、恋愛は育たないとおわかりになるだろう。そして聖書の言う信仰は、「愛」の部類の話なのである。

創世記 28:10-22

聖書の中でも感動的とされる箇所の一つだと思う。何度も言っているように、ヤコブは問題だらけである。神から祝福される要素はさっぱり見あたらない。自業自得の一人旅である。このまま野で獣に襲われて死んだとしても仕方がない、イサクたちもそのくらいの覚悟があったはずだ。それなのに、神が近寄ってきて下さっている。お前のそばにちゃんというぞ、と示して下さっている。こんなヤコブに対して、である。ヤコブの応じ方もすっきりしている。立派に生きます、などとは言えまい。自慢できることは何一つないことも分かっている。だから、鍵になっているのはただ一つのこと、神が共にいて下さるということへの喜び、感謝、それだけ。私たちにとって、この一点こそがすべてであるのだと思

う。

創世記 28:10-12

はしごと言われると、屋根に上る際に立てかけるあの形状を思い浮かべて、天使たちが両手両足を使ってよじ登っている光景が浮かんでしまうが、さすがにそれはないだろう。むしろ、天と地を結ぶ橋のようなものを想像した方が近いはずだ。本来は遠く隔てられている二つの世界が、しかしそこで連結されているという様子は、神の存在を身近に感じ、神が自分たちの回りで生きて働いておられることをひしひしと感じさせるものとして、ヤコブに押し迫ってきたのである。ヤコブは、神の存在を知ってはいただろうが、自分と直接関わる相手としては意識していなかったのだろう。まあ、現代の多くの人々もそうであるのだが。そうすると、何か「こうあるべき」と思い込むと、手段を選ばないということにもなる。ヤコブやリベカがそうであったように。でも、自分たちの身近なところで神が生きて働いておられることに気づいているなら、

その御業に期待するという大事な要素が、私たちの営みの中に入ってくる。その違いはとてつもなく大きい。ヤコブは核心部分に触れようとしている。

創世記 28:13-15

これが神のなさりようなのだと思う。神はヤコブに祝福を約束された。共にいると約束された。一方的に、である。ヤコブに対して何も要求はしていない。条件もつけていない。アブラハムに呼びかけたときもそうであった。彼が良い人かどうか、貢献したかどうか、そういうことは関係がない。神がヤコブに目を留めて、彼と共に歩むと決意されて、そして呼びかけている、それだけである。愛するという言葉の意味合いを思い出させられる。「君が何々をしてくれたら愛するよ」というのは、愛ではあるまい。「あなたが好きになりました。あなたと一緒に生きていきたい」と切望するのがこの感情だ。断られる可能性があるにも関わらず、思わず告白してしまう。そういう一方的な行動こそ、神のなさりようである。

「神の選び」という言葉を多くの人は誤解している。選びとは選抜試験に合格するかどうかではない。他の人がどうかは関係がない。ただまっすぐに、この人呼びかけていく。それが神の選び。だから、「この人は選ばれて、この人は選ばれない」という話自体が、話の筋から逸脱している。

創世記 28:16-22

ベテルとは神の家という意味だが、天の門という言葉も出てくるように、神の住まい、神の居場所というよりは、神の支配が及んでいるところ、という感覚だろう。しかも、ここだけがそうなのではなくて、ここから発して世界全体に及ぶという理解である。川の源流となる泉のようなものか。神の一方的な呼びかけにヤコブは揺り動かされ、神の存在・臨在を意識している。それは、神を信じるといううえで重要な要素である。彼の誓願は神が祝福して下さるなら、という条件付きのような言い方になっているけれど、きっと神は守って下さるだろうという期待と信頼が込められての

ものとして受け取る方が適しているはずだ。本当かどうか危ないものだというような不快感からの条件ではない。110とはつまり、神が助けてくれたから手にできたもの、という理解を表明するものとして、少なくとも当時は、110が妥当と考えられていたのだろう。そういえば日本の所得税も基本は110であり、この社会に支えられて生きているのだから、そのくらは社会全体に貢献すべきという理念があるのだと思われる。

創世記 29:1-14

母のリベカが見出された時(24章)と似ているようだが、いくつもの違いがある。まずは、神への真剣な祈りの結果としての出会いではなかったことだ。あのしもべは必死に祈っていた。ヤコブはたまたまという感じであったし、ラケルに出会ったとたんの好意は、つまりは見た目の一目惚れである。だから悪いわけではないけれど、この性急さ、御心を尋ね求めて答えを待つ余裕の欠落は、後で重大な事態をもたらす。もう一つは、相変わらずのヤコブの身勝

手さである。この井戸は、皆が集まってから開くのだと聞かされたのに(貴重な水を公平に使うためだ)、ラケルのために勝手に開けて、他の群れを顧みずに水を飲ませていく。押しのける者の姿は何も変わっていない。神がこの後、ヤコブに厳しい訓練の時を持たせて行かれるのは、まさに必要であつたからである。神の助けがなくて苦労したのでも、神に嫌われたためでもない。

創世記 29:15-30

日本でも子どもの結婚が親の都合で左右されるのが当たり前だった時代はあるので、良い労働力を手に入れるために娘を使つたラバンを、その点で責めるのは酷かもしれない。でも、レアの件は明らかにだましであるし、さらにラケルもというのは節操がなさ過ぎる。これは明らかにだましであるし、聖書はそういう認識を示していると言える。そして聖書は、たとえ当時の社会風習がこういうものを認めていたとしても、決して賛同はしていない。聖書に出てくる多くの多妻は常に混乱の種となっている。

一方のヤコブは、またしても自分の願いを実現することだけしか考えていない。最初の7年をだまし取られたことについては諦めたようだが、彼の態度はつまり、まがい物をだまされて買わされた骨董好きのようなもので、必要ないものとして放り投げていた、という感覚だ。全く無視したわけではないが、この態度が息子たちの対立の遠因ともなる。彼はまだ、神が備えて下さる、ということを学んではない。

創世記 29:31-35

レアのことを主が顧みて下さったと記されていることは、実に考えさせられる。この混乱は人間たちの問題であり、レア自身も最初のだましに加担したわけであり（父に逆らえないとしても）、何もレアだけがかわいそうなのではない。でも神は、そういう混沌とした責任問題を越えて、そこにいる一人の者が悲しんでいるのに対して、あわれみをかけてくださっているのだ。本人に何か顧みてもらえる根拠があるわけではなく、神の一方的な温情として、である。

このあり方があって初めて、人類は皆、神の恵みを受けられるのであるが。なお、彼女から生まれた者の中に、あのユダがいることは印象深い。後にイスラエルを率いる王は、創世記の主人公となるヨセフではなくて、ユダの部族から出るのだ。そして、キリストご自身もまた、である。神のご計画は、人の思いを遥かに越え、人の目に見えるものを凌駕するのである。

創世記 30:1-13

レアとラケル、姉・妹の間で、ヤコブの取り合いが始まっている。そうなってしまった原因は明らかで、ヤコブが妻を二人も持ったためだ。当時の社会通念として多妻は容認されていたにしても、聖書は強い調子で、こういう状態が決して神の御心に適うものではないことを、何度も告げている。

二人は所有していた女奴隷も使い始めている。これも当時の社会通念に反してはいなくても、事態を混乱させるものでしかなかったことは、アブラハムの例でも分かる

ことだ。子どもがほしいとか、ヤコブの気を惹きたいという思いはわかるとしても、彼女たちはすでに、自分の願いを適えるためなら何でもやる、という状態に陥っている。神を信ずるとは、そういう内なる欲求がある時にもなお、神はどうお考えだろうかと立ち止まる生き方を選び取ることに通ずるはずである。

創世記 30:14-24

恋なすびにどれだけの効果があると理解されていたのかは知らない。でもラケルは、自分が子を宿すためには何でもしよう、という雰囲気である。でも、2節でヤコブが言ったことは、まさに真実である。事は神の御手にのみある。人の画策ではどうすることもできない。だから3節でははっきりと、神が介入されてヨセフが生まれたのだと告げられている。人々は混乱を続けているのだけれど、神の御心こそがなる、という現実をわきまえていくことも必要であろう。

そしてついにラケルに子が宿る。ヨセフ

という名前をもって生涯を歩み始めたその子は、この一族に重大な変化をもたらすことになる。神のご計画は実に偉大であるということ、を、あらためて考えさせられる歩みの始まりである。

創世記 30:25-36

本来、ヤコブは妻を得るという名目で旅に出たのであった。今、妻を得、子も得たのであるから、故郷に帰ろうと考えたのは道理ではある。もともと、この名目の裏には兄エサウの憎しみから逃げるという要素もあったことは、もちろんヤコブも承知していたはずだ。それでも帰りたいと願ったのか、それとも、良い報酬を手にするための口実であったのか。

いずれにしても、ラバンにとってヤコブは貴重な労働力になっていたようだ。今度は娘ではなく家畜という報酬を指し示して、ヤコブを留めようとしている。畜産には疎いけれど、話の筋からして、ヤコブの取り分とされたものはごくわずかなものだったのだろう。可能な限り使い切ってやろうと

するラバンの思いが透けて見える。だが、困難だからと尻込みしていたら、決して手に入らないものもある。ヤコブは果敢に取り組み始めている。

創世記 30:37-43

こゝで注目すべきは、このやり方に効果があるかどうかではなく、決して不正を働いているわけではないのけれども、巧妙に自分の群れを強くしていったヤコブの姿であろう。ラバンの群れを養い育てる責任があるのだから、その点では怠慢を責められても仕方がないはずだが、このやり方についてはラバンからの抗議も見られないから、許容範囲であったのだろう。

ただ、人間の領域においては「才覚」という言葉で言い表すことができるけれど、神への信頼や期待という意味合いではどうか。そう、ヤコブは相変わらず自分の「才覚」に頼り、神が助けてくださることを期待して待つということを全くしないのだ。もし、神が豊かに祝してくださると期待するなら、回りからは愚直と言われても、誠

実さを中心とした取り組みを続けて、必ず道が開かれることを待ち続けるという選択肢があってもよさそうなものだ。でも、ヤコブも、私たちも、そういう忍耐を忘れている。

創世記 31:1-13

ヤコブの言い分は、何となく自己正当化の臭いがするし、ここまでの記事では出てきていない話も盛り込まれている。だが、ラバンの娘たちの前で、これだけ堂々と言いつけるのだから、おそらく、30章まででは割愛されていた事情なのだろう。

それよりも、ヤコブが妻たちにちゃんと計画とその理由を説明しているあたりに注目したい。当時、妻も子も、主人の所有物的な扱いを受けていたはずだ。相談の必要はなく、黙ってついてこいでも良かっただろう。でも、故郷に帰るにあたり、ヤコブはそれを自分一人の出来事ではなく、家族全体の営みとして受け止めていきたいと考えたのだと思う。ついにヤコブは、アブラハムから継承されている約束を実質的に受

け継ごうとしている。それは彼個人だけではなく、彼に続く子孫全体としての継承であることを、彼は意識させられていたのだと思う。

信仰の継承というけれど、単に信じさせるといっただけではなく、神の約束・祝福の継承としても意識していく必要があるようだ。

創世記 31:14-16

レアとラケルの態度は、何とも手厳しい。彼女たちは自分らの父親に愛想を尽かしていたようである。それはそうだ。結局彼女たちは、ラバンの都合によって、まるで品物のように売り渡され、しかも姉妹で一人の夫というような事態にもなっている。それ以前のこの姉妹がどういう仲であったのかは分からないけれど、この結婚によってぎくしゃくしたのは間違いない。女性たちのこの強さ、聖書はこの後もしばしば、そういう姿に着目している。社会の制度は過酷であったはずだが、彼女たちは自分の居場所を堂々と築いている。そういうえば、ロー

マ帝国にキリスト教が浸透するに当たっても、妻たち、母たちも存在が大きな作用となっていたのだという話を聞いたことがある。

創世記 31:17-21

この行動力には驚かずにはいられない。心を決めたら、あつという間である。妻たちを野に呼び出したのも巧妙であるし、足も速い。ただし、この後に書いてあるように、ヤコブの一行が安全に行くことができたのは、神がラバンに言い含めたからである。ヤコブは相変わらず自分の才覚を誇っていたはずであるが（確かにすごいのだが）、真の力は神にこそあり、である。

とは言え、その程度の思いであるけれども、ヤコブの全ての行動において、根底でそれを支えていたのが、ベテルでの神の約束（共にいる）であったこともまた、端々に出てきている。彼の自己主張や蒙昧を許容することはできない。それでも彼は、神が共にいてくださるとの約束を握り続けていたことについては、かなり重要なことな

のだと思う。

創世記 31:22-29

ラバンにとつてのヤコブの意味合いを考えると、無理やり連れ戻したとしてもあまり意味がなく、冷静に考えれば旅立ちを黙認するしかなかっただろう。でも、カッとなると何をしてしまうか分からないのが人間である。神の言葉は彼に冷静さを取り戻させたと言えるし、皮肉と嫌みたっぷりのがらも、ラバンの対応は大人である（ヤコブは相変わらず子どもっぽいのだが）。

それにしても、アブラハムのような信仰を持つていたわけでもないのに、神から呼びかけられると、その權威には従わざるをえないとすぐに認めているあたり、アブラハムの一家がラバンたちに親近感を抱き続けていた理由が分かるようだ。これがラバン一家だけなのか、それともメソポタミア方面一般に見られる意識なのかは分からない。でも、神に対する一般的な恐れがあるかどうかは、そこから先、神と真剣に向き合うようになるかどうかのためには、かな

り大事な要素であるように思う。あいにく日本は、この素地が非常に薄いように思う。

創世記 31:29-35

ラケルがテラフィムを偶像のようにして拝みたくて盗んだのかどうかは分からない。後の様子からすれば、テラフィムは神と向き合おうとする際の道具のようでもある。信仰の問題と言うよりもむしろ、ラバンの大事にしているものを取ってやれ、という反発心に近かったのではないか。

しかし、盗みは盗みである。いくら親のものであったにしても、だ。それに、ヤコブにも危機的な迷惑をかける場所であった。ヤコブもまた、余計なことを言って、あやうくラケルを失うところであったわけで、どんな理由があろうとも、盗みやごまかし、嘘偽りというものは、そうとう危険なところに自分も回りの人々も追い込む可能性があることを、痛感させられる出来事である。この一家の中に、神に従う民という性質はまだまだない。いや、アブラハムの例のように、それは長い年月をかけて、

神ご自身によって訓練され、整えられていくものであるのだろう。

創世記 31:36-42

ヤコブは短慮に過ぎる。そして、言葉が過ぎる。彼は自分の才覚を信じていたのだが、それがいかに危ういかと言うことを、改めて痛感させられる出来事だ。ラバンに対する不平不満はまあわかる。だが、それに合わせて彼は、テラフィムの件でも、あるいは、神がラバンに語られたことについても、自分に都合の良いように理由している傾向が見える。神が事を動かして下さっていることは見ているのだから、なおさらのこと、もっと謙虚であるべきなのに、そういう姿はまだまだ見えてこない。この後も、そういう性質のゆえに、ヤコブは痛い目に逢い続ける。神が与えてくださったものの中には痛みを伴う訓練もあるわけだが、できることなら、もっと素直になって、よりましな状態で訓練を受けていきたいものだ。ガラテヤ5章の御霊の実は、自分自身のためにも必要ことがたくさん含まれて

いる。

創世記 31:43-55

私たちは、いわば神ご自身の目に映っているものを見せていただいているので、ヤコブの言い分が何とも底の浅いものであることを知っているのだが、ラバンにはそこまで見抜けるはずもなく、そして、人間的な感覚で言えば、ヤコブの弁舌は実に力強いものに見えるようである。私たちも、自分に見えているつもりのものが、かなり危ういことを自戒しておくべきだろう。

ヤコブの愚かさとは別に、しかし神は、約束を守ってくださいと、ヤコブは無事にラバンのもとを離れることができるようになっていく。それにしても、ラバンのヤコブに対する警戒心はどう考えたらいいだろうか。あきらかに、ラバンやそちら方面の人々、メソポタミアは間違いなくカナンの人々よりも強大である。でも、神の約束を受け継ぐ者たちについては、自分たちの力を越えるという意識。実は、後のイスラエルあるいはクリスチャンたちも自覚してい

ないことが多いのだけれど、この世はしばしば、自分たちをはるかに超えるものとして信仰者を見て、ゆえにこそ戸惑い、恐れ、反発をすることもある、ということだろうか。それを自分の誇り、偉ぶる理由にしてしまつては論外だけれど、主の確かさを意識する心は、詩篇などにもよく出てくる。

創世記 32:1-8

帰郷に際して最も懸念されたのは、兄エサウの対応である。何しろ、エサウの復讐から逃れるために、ヤコブは家を出て行ったのだから。かなりの財産を持つようにはなっていたけれど、ラバンの場合でもわかるように、実力で衝突した場合については、ヤコブは自信がなかったようだ。祖父のアブラハムとは違うように見える。

それで、あらかじめ低姿勢の使いを送つたわけであるが、このあたり、尊大なヤコブが厳しい状況の中で帰られつつあるのが見えるようだ。彼の画策ではどうすることもできないものが、まもなく待ちかまえているわけで、そういうところを通りながら、

彼は神を信ずるということの意味を、しっかりと問われていくことになる。

エサウが迎えに出てくるとの知らせを聞いたとき、しかも、400人を引き連れてくると聞いたときのヤコブは顔面蒼白であつたに違いない。

創世記 32:9-12

ヤコブの祈りとしては、本格的にはこれが最初とも言えるのではないか。彼は神に願っているのだけれど、その理由、根拠が注目できる。守ると約束してくださったのだから、その約束の通りに頼みます、というのが、ヤコブの求め方になっている。これはいい。いや、これ以外に、神に祈る道筋は本来ない。彼は自分が決して神に評価され得るものでないことに気づいている。

神に要求できる立場ではないのだ。それでも、神ご自身が守ると約束されたからには、ということである。12節は、ヤコブ自身への神の言葉とは少し違うけれど、アブラハムへの神の約束を反映していると言える。ヤコブは、その約束の継承者なのだから、

当然でもある。

創世記 32:13-21

贈り物をするのが悪いとは言わないけれど、ここまでやると、ちよつとげんなりする。神に祈り、その一方で、やはり彼は自分にできることをやり尽くすことしかできないようだ。そういう努力そのものが悪いわけではない。でも、結局彼は、どこまでも頑張つても、相変わらず不安は解消せず、戸惑い続け、道を見出し得ないでいる。才覚に溢れた人であるのは間違いないのだが、彼はその能力を発揮すべき部分を見失っているように思う。

良き才能、資質が与えられていることは幸いだ。それをどのように生かしていくのかについても、しっかりと神の御心を、導きを求めていくことを忘れないでいたい。そうすれば、賜物の大きさがどうか以上に、真に満足して、良きものを手にした日々を歩むこともできるようになるだろうから。

創世記 32:22-23

夜のうちに川を渡ったということは、渡っている途中で襲いかかられたらどうすることもできない、という不安から出たことだと思われる。無事に渡って、このまま夜の闇に包まれていれば、少しは安堵もできる。先は分からないけれど、とりあえず無事に川を渡れたことで、ヤコブもほっとしたのだと思う。そんなときに、一人残って、物思いにふけりたくなるのも分からないではない。

ただ、ここの象徴的な光景がある。かつてヤコブは身一つでカナンの家を出た。そして今、数多くの財産、そして家族と共に戻ってきたけれど、ぎりぎりのところに立たされた今、彼はまた、たった一人なのだ。彼の場合、神と真つ直ぐに向き合う機会を得るためには、どうしてもここで一人になる必要があったようである。それは私たちにも必要なことであるかもしれない。

創世記 32:24-32

相手が神（天使）だと分かっている戦っ

たわけではないから（30節）、突然、襲いかかってきた見知らぬ人と格闘したということになる。むろん、本来の力からしてヤコブに勝ち目はなかったのだが、必死になって、負けられぬと戦うヤコブの姿は、考えさせられる。彼は今、エサウという問題に直面し、生命の危険に迫られていたところである。そして、神に祈り、神の助けを叫び求めているところである。神が必ず助けてくださると信じていたヤコブである。そんな自分が、こんなところで、訳も分からない相手に打ち倒されて死ぬわけにはいかない。神がエサウから守ってくださっている最中なのに、そんなことがあるはずはない。だからこそヤコブは諦めず、そういうヤコブの姿を、神もまた好ましく受け止めてくださっているのだろう。神の御心であれば、死もまた雄々しく受け止めよう。だがそれは、あきらめとは全く違うものであり、また、敗北してうちひしがれる姿ではないのだ。

創世記 32:30

神の顔、という意味合いの名が、この場所につけられている。神と面と向かい、しっかりと向き合い、本気で関わっていくことを、ヤコブは体験したのである。厳密に言えば天使であり、神の栄光そのものを目の当たりにしたわけではないけれども（それはこの世にある人間には不可能）。

ヤコブの生涯は多くの混乱に満ちている。彼自身に原因がある場合があまりにも多い。それは結局彼が、神ではなく自分を見ていたことから来る。神を礼拝はしても、事を画策して、推し進めていくのはあくまでも自分。そんな姿の繰り返しであった。彼は今、神と向き合わせられ、圧倒する神の力を身をもって体験し、そして、そこに祝福が用意されていることを知った。神と面と向き合うこと、それこそが人のあるべき姿であることを、私たちもまた知らねばならないはずだ。

創世記 33:1-11

ついにエサウとの対面となる。どうやらエサウは、彼の性質でもあるこだわりのな

さ、それは大事なことにについても考えが浅いというところまで行ってしまうものであるのだが、そのおかげで、ヤコブに対する憎悪を過ぎ去らせてしまっていたようである。彼は単純に久しぶりに弟に対面できたことを喜んでいる様子だ。

ヤコブはどこまでも低姿勢である。エサウを信じ切れていないと言うこともあっただろうが、かつてのようにエサウと対決し、どちらが優位に立つかを競う必要性を覚えなくなったことも理由だと思う。彼はようやく、我を張ること、自分の知恵で画策すること以外の道があることを気づかせられたのだ。幸いにも、この後、二人の間に争いは起こらなかった。人が変えられていくのには、かなりの時間が必要な場合もあるけれど、それでも神は事を成し遂げられるのだという、一つの実例である。

創世記 33:12-17

エサウの誘いには、おそらく何の計略も含まれていなかったと思われる。純粹に、弟との再会を喜び、気前よく人手を貸そう

としたに過ぎないだろう。でもヤコブは、そのように単純には受け止められなかった。理由は明快だ。彼がかつてしたことの記憶の故である。

罪は神との関係を破壊するが、同時に人との間柄も破壊する。もつと素直に向き合ったら良い結果が待っているのに、それをできなくしてしまう。人を信じることも、信頼することも妨げ、せつかくの良いものを地に投げ捨ててしまうようなことを引き起こす。この世界の混乱と不幸は、まさに人自身の罪によってもたらされていることを思わせられる。やはり私たちは罪から解放され、真実に生きる道があることを見出させていただく必要がある。もし、幸せになりたいのであれば。

創世記 33:18-20

エサウとの対面を無事に果たし、ヤコブはほっとして残りの旅路を歩んだに違いない。まあ、当然であるし、どうぞ一息ついて、と心からお薦めしたいところである。彼が滞在したシェケムもカナン地域の中で

あるから、ここに拠点を構えようと考えたのも、何か悪い思いから出たものとは言えないはずだ。

ただ、聖書は彼が土地を買った話を記録している。これまでアブラハムの一族が土地を買ったのは、あの墓地にするための場所だけだ。神はこの地域全体を与えると約束されたことは意識しつつも、実際の行動においては、実に控えめである。後に詩篇が歌うように、土地の所有ではなく神が味方でいて下さることこそ私の基盤、という意識が感じられる。でも今、ヤコブは土地を買っている。あっさりと、何事もなかったかのように。そして、シェケムに居を構えるのがよいのかどうかについても、御心を思案することなく。次章において、彼はせつかくの所有地を離れざるをえなくなる事件が起こる。

創世記 34:1-7

昔、日本でも夜這いをかけて既成事実を作り、妻を獲得するという風習が、祭りの時などに見られたと聞いたことがある。後

に士師記において似たようなことをイスラエル民族もしているので、社会一般としてはありそうなことであつたのかもしれない。ヤコブ自身も、ラバンの計略によつて妻を押し付けられている。この息子たちの性道徳は、あまりきちんとしたものではなかつたことも、後々記録されている。

とすれば、彼らが怒つたのは単に正義とか、品行の問題ではなく、「イスラエルの中で」とあるけれども、自分たちの領域を荒らされたことへの怒りと見るべきではないか。だから、対処の仕方もおどましいものとなつている。そこには神の前に正しさを求めるような姿勢は見られない。これを教訓とするなら、もし、正義の怒りを覚えることがあるなら、その対処の仕方においては、厳密に厳密を期して、神の御心に適う手段を用いること、そこから決して逸脱しないことを、よくよく肝に銘じておくべきだろう。

創世記 34:8-12

シェケムという若者は、良い人であつた

のだと思う。彼は真剣にデйнаに対する愛情を示しているし、大切にするつもりもあり、そして、ヤコブたち家族への態度も礼儀正しいものと言えそうだ。父親のハモルも誠実な態度で挨拶に來たわけであり、そうやって考えると、このシェケムはデйнаの結婚相手としてかなり良い対象と言えそうである。だが、事態は惨劇へとつながっている。そして、口火を切つたのは好青年であるシェケム自身である。彼の行動が全ての発端であつた。

今日、性的な事柄については、かなり放任主義的になつていて、どういう経緯であつても、最終的に二人が真剣であるとか、誠実に付き合つていくとか、そういうことであればそれで良い、という風潮がある。でもこの事件は、事後においてどれほど誠実でも、それで問題なしというわけにはいかないことを深く考えさせるものだ。何も問題性を感じていない様子のシェケムだが、彼は一族に多大な被害をもたらしてしまつたことになる。たいしたことではない、という言い方は、こういう部類のことについては、決して口にすべきものではあるまい。

創世記 34:13-17

割礼は、当時のオリエント地域においては、風習の一つくらいに受け止められていたのかもしれない。だからこそ、シェケムの人々もこの要請を受け入れた。もしこれが、世間一般の話であつたら、軍師としての才能優秀とでも見ることができたのかもしれない。

だが、ヤコブ一族にとつて割礼は、アブラハムから始まる神との契約を示すものである。単なる風習ではなく、神の前に生きることが指し示す重大な儀礼であつた。でもそれを、彼らは計略として使つた。相手をだまし、自分たちの思いを遂げるために用いた。神の御心が何であるかを尋ねることもなく、つまりは神とは関係のないところで、その大事な印を使つた。

神との関わりにどれだけ真剣さがあるのかは、こういうところに現れてくるのだろう。そして、現代に至るまでの教会は、神から託された大事な事柄を真剣に用いてきているかどうか、全く別の意図のために利

用してなどいいかどうか、よくよく自らを問いだしておいたほうが良いのではないか。

創世記 34:18-24

財産だけが目当てだったとは思えない。町の人々が同意したのは、ヤコブ一族が持っているもの全体、つまりは神と関わって存在しているという特別な事柄に、魅力を感じたからこそであろうと思う。アブラハム以降、この一族は、時に周囲の民から、祭司としての役割を果たしてほしいと求められることがあった。つまり、この人たちならば神との仲立ちをしてくれる、ここに神につながる道があると受け止められていたのだ。町の人々は神のことを十分に理解したわけではないだろう。でも彼らは、ヤコブ一族を良いものとして見ていた。神を信ずる者たち、神の前に生きる者たちは、本来、こういう魅力、興味を抱かれるはずの存在なのだ。何の関心も抱かれずに素通りされてしまったら、これほど悲しむべき事はあるまい。

創世記 34:25-31

残虐である。好意から出た行動のゆえに抵抗できなくなっている相手を、なぶり殺しにしている。彼らなりの正義があったのかもしれないが、その手法などからしても、とうてい認められないものだ。父親のヤコブが、事の是非について曖昧な態度を取っていることにも注目しよう。彼の言葉は単に、危険な状況を作り出したことへの苦言にすぎない。もし、息子たちの言うように、いのちをかけても戦うべきであるのなら、正々堂々やればよかった。そんな決意もないままに、ただ感情の赴くまま残虐さに走る姿は、人間の持つ最も愚かしく、また危険な姿そのものである。ヤコブは再び、身の危険を覚えて逃げなければならない。かつては自らの愚かな行動ゆえに兄のエサウから逃げたヤコブは、今度は息子たちの愚かな行動ゆえに、せっかく買い取った土地を放棄させられてしまうのである。

創世記 35:1-8

結局、ヤコブは自分が選んだ居住地にいらなくなり、再び、旅を続けざるをえなくなつた。念のため、この事件は神がそう仕向けたわけではない。その場所が望ましくないのであれば、神はもっと普通の手法で教えてくださっただろう。こんな事態を引き起こしたのは彼らである。その事情を通じて、なお神が彼を最善へと導いておられる。この違いをよく考えておきたい。

それにしても、ヤコブもここで、なるようになるだろうという生き方は問題であると気づいたようだ。主なる神以外にも頼るような部類のものを、きちんと処分して、自分たちは主にこそ期待し、主の導きにこそ従っていきます、ということをしつかりと表明している。人が完全な者になり得ないことはもちろんだが、だからこそ、こういうきちんとした節目を持つことは必要だと思う。

創世記 35:9-15

この場所、ベテルは、ヤコブが旅だった

ときに、神からの約束を受けた、その場所である。今、彼はそこに戻ってきた。いや、神がヤコブをそこまで無事に連れ戻してくださった。神の約束は確かに果たされたという、大事な場面である。私たちは神に願ひ、神に期待するけれど、神が確かに約束を果たしてくださったことを思い起こしたり、感謝することを忘れている場合が多い。でも、約束の実現を確認するからこそ、さらに先に進んでいくこともできるのだ。ここでも神は、ヤコブにさらなる約束を与え、彼とその一族を先に進ませようとしている。イスラエルという名前は、32章ですでて出てきているが、この時から正式な名前として用いられていく。「神と戦う」（真剣に関わることに通ずる）という意味合いだけでなく、「神が戦ってくださる」というふうにも言えるわけで、神に導かれて歩む者には似つかわしい。

創世記 35:16-29

ラケルはヤコブが最も愛した女性であったが、彼らが安住の地に至る前に亡くなっ

ている。あのアブラハム一族の墓でもない。それはラケルのせいではないけれど、人の思い通りにならないことを、改めてヤコブは痛感していたことだろう。我が身の才覚で突き進んで来ようとしていたヤコブだが、決してそうはなりえなかったのである。

イサクがここで亡くなっていることにも注目したい。イサクの後継を争ったヤコブとエサウであるが、彼はずっと生き続けたのだ。そして、和解した二人によって葬られている。人の思いや対立、画策はいかにむなしいかを思い知らされる。

あつさり書かれているだけだが、長男ルベンの行状が書いてある。後に重要な意味を持つ。

創世記 36:1-8

エサウが、アブラハム以来の地域を離れていった。かつては後継者争いをしたエサウだが、もともと淡泊な性格で、現状の暮らしに最も適した場所を選んだに過ぎない行動だったと思われる。ヤコブの執念深さに比べて、周囲の人たちからは好まれやす

い人物だったかもしれないが、あまりにも淡泊すぎると神との関係もその辺に放り投げてしまいう危険がある。神への熱心は、ちゃんと意識していくべきことであろう。

それにしても、せっかく仲直りした二人が、平和にとは言え、結局分かれる羽目になったのが、経済的な理由から、しかも家畜が多すぎるからということであるのは、ため息をつかずにはいられない。豊かに祝福してくださいと神に祈る私たちが、合わせて、その富が誰かとのいさかいにならないようにとの切なる祈りを、決して忘れてはなるまい。

創世記 36:9-43

マタイ1章にあるようないわゆる直系の系図であれば、まだしも考えるべきことは多いけれど、エサウの系図となると聞いたこともない名前が並ぶばかりで、大きな紙に一人ずつ書き記してみないことには、全体のイメージを把握することすら困難だ。神も、エサウの子エリファズ(10節)について黙想することを求めてはおられないと

思う。

ただ、アブラハムに与えられた約束を受け継ぐ者ではないエサウについても、これだけ詳細にその行く末が語られていることは、心に留めておきたい。聖書は確かにイスラエル民族に注目している。だがそれは、他の民族はどうでもよいということではない。ある人に神は特別な使命を与え、だからこそ関わりが大きくなるかもしれない。だがそれは、他の人々をなおざりにすることではないのだ。使命ゆえに目立っていることと、神がちゃんと目を注いでおられることは、別の話である。

創世記 36:20-30

ホリ人というのは、14章にも出てくるように、明らかにアブラハムの一族とは別の存在である。その部族のことがエサウの歴史の中で語られているのは、2節と24-25節を見比べると分かるように、エサウとの結婚によって、この一族が融合していったためである。後の歴史からすれば、エサウの子孫に吸収合併されていたのだと言え

るだろう。

エサウは近隣民族との融合に抵抗感がなかった。いや、他民族という意識もなかったのかもしれない。アブラハムもイサクも、自分たちには違いがあるのだという意識を持っていた。後のユダヤ人のように民族としての優越性などではない。神の約束を受け、神の使命を受けている者であるという自覚が、そこに違いを生じさせていた。継承者ではなかったエサウにその意識がないのは当然かもしれない。

他を排除して純血を守ろうという話ではない。優劣の問題ではなく、排除することが重要なのではない(ダビデの曾祖母はモアブ人である)。神の前にあって自分たちが与えられている使命、意義というものをどれだけ意識しているかが問われるべき点だ。それゆえ、モーセの時代、イスラエルは改めて神と向き合い、その使命を指し示されていく必要があった。あの頃のイスラエル民族は、それを忘れ去っていたようであるから。

創世記 37:1-4

いよいよヨセフの登場だ。けれど、この頃のヨセフは、決して好ましい人物ではなかった。彼は父親の依怙贖肩を笠に着て、兄たちに尊大な態度を取る、いやな奴であった。もちろん、父親の責任は大きい。年寄り子がかわいいのは当然であるが、そのことと、息子たちの教育を毅然として行うこととは別だ。それにヤコブは、上の息子たちの教育には失敗している。なおさらのこと、よくよく心して向かうべきところを、でもそれが人間の弱さであるのだろう。この弱さを自戒しつつ、対応策を備えておくことは大事だと思う。むろん、神ご自身が導いてくださるのは確かだ。でもそれは、最愛のヨセフを大いに苦しめることになったことを、忘れないでおきたい。

創世記 37:5-11

後のことを知っている私たちは、この夢が神によって示された予告であることを理解できる。やがて事態はこの通りになる。でも、彼らにそれを悟れというのは無理が

あるだろう。ヨセフの高慢な態度ばかりが鼻につく場面となってしまうている。もし、ヨセフがこのことをよほど重大な夢として確信があったのだとすれば、なおさらのこと、それをどのように語るべきか、あるいは心に留めておくべきか、よくよく考えたはずだ。たとえば、父親にだけ相談するとかもあり得る。でも彼はただ、兄たちに誇るばかりだった。どんなに良きこと、貴重なことを知り得ても、それが意味をなさない場合がある。御言葉の種は、蒔かれるだけではなく、それを受け取る土地のありようが問われるのだと、キリストも語られた。

創世記 37:12-17

このまま13年以上、ヨセフに会えなくなるなどということは、ヤコブの頭には全くなかっただろう。当たり前だ。すでに17歳。道に迷う年齢でもない。そして、向かった先は兄たちのところなのだ。でも、事態は最悪のものとなってしまった。後に嘆き悲しむヤコブを、息子たちは慰められずにいるのだが、誰でも常に、自分のすること

が回りの人々に対してどのような影響をもたらすのかを、よくよく考えて行動すべきである。彼らは父親を嘆かせたいと思っていたわけではないのだから。と同時に、物事には絶対に大丈夫ということはないのだと、心したい。そしてだからこそ、大切な人々のことを、神にこそ委ねていく心を、決意を、そして祈りを、欠かさないでいたい。

創世記 37:18-24

最年長のルベンは、事態を最悪のものにしてはまずいという思いには至った。さすが長男と言いたいところだが、彼は事態を、弟たちを甘く考えすぎていた。助けるつもりならば、もつとしっかりと対処すべきなのだ。殺そうという話が出ていたのだから、ヨセフから目を離してはいけなかった。事の最大の責任は、38節からしてもユダにある。だが、まずいと分かっていたのだからなおさら、ルベンの落ち度は深刻である。なすべきことは、きちんと最後まで取り組む必要がある。力足らずに失敗するのは仕

方がない。でも、油断してはいけないのだ。人間の邪悪さをごまかしなしに語る聖書を見ていくと、私たちに求められているあり方の厳しさを、大いに考えさせられる。

創世記 37:25-30

弟のヨセフを売り飛ばした張本人、言い出しつぺは、ユダである。むろん、他の兄弟たちの責任も同じだが、聖書はユダの行動に注目している。この後38章にも出てくるように、やはり、ユダの存在に大きな関心が向けられている。創世記が書かれた時点では、人々は後のダビデ王朝などを知るはずもなく、むしろ創世記では、ヨセフこそが後継者筆頭という印象が強い。だから、後の王朝を意識してのものではなく、43-44章のユダの姿を念頭に置いての注目だろう。ヨセフを売ったユダが、自らを捨てようとすることになる。

それにしても、ルベンの言葉に説得されたか、自ら手を下すことは控えたのだけれど、奴隷として売り飛ばすのはその場でいのちを奪うのと、大して差はない。ようす

るに、邪魔だったということである。目の前から消し去りたい。殺して消すのも、売り飛ばして消すのも、どちらでも彼らにとって結果は同じだ。憎しみ、そして誰かを邪魔者扱いすることは、邪悪な行動につながりえるのだということを、大いに考えさせられる。

罪が戸口で待ち伏せしている(創4:13)という警告を、よくよく心に刻んでおかねばならない。

創世記 37:31-36

ヨセフを失ったら、父ヤコブがどれほど嘆き悲しむかを、兄たちは全く意識していなかったと思われる。彼らとしては、父親の心を傷つけるつもりはなく、大事に思っでもいた様子がある。ヨセフをやっつけることと、父への尊敬の心と、何の関係もないこととして、いや、考慮もしなかったのだろう。

でも、一步引いて冷静に客観的に考えれば、ヤコブが嘆き悲しむであろうことは、おそらく誰が考えてもすぐにわかるはずの

こと。それに彼らは全く気づいていない。誰かへの憎しみが増すとき、それは他の人もしかすると、とても大事に思っている相手のことを、激しく、深く傷つけることにもなる。それが罪というものの姿だ。私たちは、この厳しさを知っておかねばならない。

ずっと後で、誰かに対する関わり方を告げる際に、「キリストが我が身を捨ててまで愛された相手である」ということを意識せよということが語られていく。単に自分と相手との関係だけではなく、そこに神があられて、関わっておられることを、よくよくしつていく必要がある。

ヤコブの悲しみは何によっても癒される
ことがなかったのである。

創世記 38:1-12

この出来事の背景には、直系の子孫を残すことに重大な価値があるとされていた事情がある。現代日本でこそ、それなりに薄まってきたとは言え、人類全体としては今なお根強い感覚である。だが神は、その点

のみを重視はしていない。子どもが生まれるかどうかで、その人の価値を上げ下げするようなことは、神は決してなさらない。

もちろん神は、子どもを望む人々の思いを温かく受け止めて下さっていて、時には奇跡的に顧みて下さる場合もある(アブラハムなど)。だが、もし人々が、子どもの有無によつて互いに批判し合ったり、けなし合ったりするのだとしたら、それこそ神がお怒りになるものである。せつかくのまっとうな願望が、人々たちの邪悪さによつてゆがめられ、互いを傷つけるものとなる事例の一つである。

創世記 38:9-10

子を持たずして死んだ兄の代わりに、弟が未亡人と結婚するというのは、当時の社会では常識であったようだ。つまり、子孫を残すということへのこだわりである。その場合、最初に生まれた子には兄の家を継がせるというのが原則であったと考えられる。日本の場合には、二人目、あるいは三人目を兄弟の養子にして後を継がせる、とい

うやり方があるようだが。

ともかく、当時はこれがごく自然なことであり、弟の責任とも理解されていた。だからオナンの行動は邪悪であったのだ。生まれた子を渡したくないといってこねるのであれば、まだ親としての人情とも言える。だが彼は、兄に渡すくらいなら、自分もいないと言う。第一列王3:26にある後者の言葉が類似するだろう。人の手に渡すくらいなら壊してしまえという感覚は、あまりにも醜い。

創世記 38:11

ユダは家長として、この事態を適切に集結させる責任があった。だが、彼は逃げたのである。うまいこと口実を作り、問題を先延ばしにした。でもそれは、タマルにとっては死活問題である。時が経つほどに子が生まれる可能性はどんどん少なくなるわけで、ユダのごまかしは、彼女にとってばかり、存在価値をすべて否定されたように感じられたはずである（その背景には、子を産むことを絶対視する風潮があったわけ

だが）。

おそらくユダは、そんなふうにして否定するつもりなどなかっただろう。どうすれば良いかわからないので解決を先延ばしにただけである。彼にとっては何細なこと、邪悪な行為とは別だという思いがあったに違いない。でも、その程度にしか意識されていない事柄が、重大な事態を引き起こすことを、私たちはここに見せつけられるのである。小さな話だといって事をごまかし、逃げるのは、それ自体が罪から来る姿であり、そしてまた、神を信用していない姿であろう。

創世記 38:12-23

タマルの意図は明白で、ユダの家系を宿す必要があるという切迫感である。もちろん、とんでもない行動であった。不節以降を見ると、当時の社会でもタマルのような立場の人が遊女のまねごとをするなど、決して認められないことであったのが分かる。彼女は死を覚悟して事を起こしたに違いない。彼女の問題と責任をいくらかでも軽く見

ようとする姿勢は、聖書にはない。ただ、

ユダの責任ということも取り扱われていることを知っておきたい。ユダの責任だからタマルのほうは軽減する、という話ではない。彼女には彼女の罪があり、責任がある。ただ、聖書はむしろ、ユダの問題に注目している。当時の社会風習としては、遊女との関係をさほど追求しない傾向はあったのだろうが、しかし、この事態を引き起こしたのはユダであり、彼こそが問われるべき者であったことを、聖書は強く語っている。責任回避は、神の前には成り立たない。

創世記 38:24-26

ユダがタマルを罰しなかったのは、自らの責任を痛感したからであり、また、当時の社会としては結果的にユダの後継者を宿したということで、その意義を重視する傾向があったためだろう。この事例をもって、動機が良ければ愚かなことをするのも仕方がない、という根拠にはできない。

ただ、この事件はユダにとっては異議ある教訓、薬となったようだ。彼は自らの愚

かさと過ち、そして身勝手さも思い知った。父親のヤコブが自らの過ちを通じて学んだように、ユダも同じ道を歩んである。だから失敗した方が良い、という話ではない。あまりにも愚かな、罪深いことをしてしまっただけですら、なお神は、その事態を用いて意義あることをなしてください、という話である。

神はこの世界や私たちの人生の傍観者、観客ではない。主役あるいは監督として、主體的に関わって下さっていることを、私たちは知るべきであろう。それは恐ろしくもあり、また、感謝でもある。

創世記 38:27-30

ヤコブとエサウのことを思い出させる出来事だ。もともと、彼らのその後が、ヤコブとエサウのようであったという話は聖書には何も出てこないの、あくまでも出産時点での類似に限定して考えたほうがよい。でも、ユダにとっては深刻な話であったはずだ。彼は人の罪深さと、そしてまた、愚かさ、性懲りもなくと言われてしまうよ

うなものであることを、深く考えさせられたに違いない。こういうことを経て、やがてユダは一族を救う役割を果たしていくようになる。悔い改めは、大きなことを成し遂げていくものである。そして、キリストの系図にはこのタマルが載っている（マタイ1:3）。そう、人の罪深き行動を語ること、は、神の与えてくださる赦しへと話をつなげていくものなのだ。

創世記 39:1-6

絶望と落胆は、人から生きる力を奪い取るのだと言われている。奴隸として売られ、見知らぬ土地に連れて行かれ、こき使われたとき、それでもしつかりと働き、誠実にご主人様に仕えていったヨセフの姿は、実に驚くべきものだ。しかも彼は、甘やかされて育ち、兄たちに対しても横柄な態度を取り続けるような若者だったのだ。

彼の心境の変化について、聖書は詳しく語っていない。ただ、「主が共におられた」という一言が繰り返して出てくる。真つ暗闇に放り込まれた時、ヨセフは気がついたの

だろう。主が共にいてくださることを。かつて父親のヤコブも、家から追い出された時（実質そうであった）、しかし神が共にいてくださることを知った。主が共に。うちひしがれるような事態の中で、彼らはそこから再び歩き出したのである。

創世記 39:7-23

この件に関して、ヨセフには何の責任もない。彼はただ誠実に働いていただけである。主人も認めてくれていたのだ。だが、一瞬にして奈落の底に落とされてしまった。あの信頼は何だったのかと言いたくもなるが、でも、これが人間である。真実とか正義ではなく、ただ感情と思い込みだけで動いてしまうのだ。

でも、ヨセフは腐らなかつたようだ。彼は牢獄でも誠実に仕えていた。主が共にいるという言葉が、また繰り返されている。理不尽だと叫んでもいい。どうしてこんなことをと神に訴えてもいい。ただ、それだから自分もいい加減に生き、愚劣な態度で暮らしてしまうなら、それは自分自身をだ

めにする。どんなに正統な理由で腹を立てていたとしても、だからといって家具を思いつき蹴飛ばせば、怪我をするのは自分なのだ。ヨセフも嘆いただろう。でも彼は、自分の生き方を壊してしまうことはしなかった。これは大事なことだ。

創世記 40:1-19

神はヨセフに、夢と関わる人生を与えたようである。エジプト王の高官たちの夢を、彼は説き明かしている。むしろそれは、神が指し示してくださった答えであろう。彼自身にそういう能力があったわけではないはずだ。以前、自分に関する夢の時には、その意味を理解できていないのだから。

彼が、自慢げに夢を解いているわけではない点に注目しよう。彼はただ、二人のいらだちに応えたかっただけであるのだ。残念ながら、一方に待っていたのは悲劇であるけれど。もし、特別な機会が与えられるとしたら、どのような心で取り組むのかについて、ヨセフは大事な模範を示してくれている。彼の能力云々だけでなく、その誠

実な姿勢が後々につながっていく。

なお、彼は決して夢の解釈を職業にしたわけではない。彼の仕事は家の管理者であり、国の管理者である。夢とは対極にある事柄こそ、彼が誠実に取り組んだ事柄であつたのだ。

創世記 40:20-22

またしても、である。またしてもヨセフは裏切られた。人の心はあまりにもいい加減で、自分のことしか考えてはいないのだということ、ひしひしと思ひ知らされたに違いない。後で、兄たちについても慎重になったのは、こういう経験も関係しているかもしれない。

聖書は、人を愛することを教えている。人を大切にすること、必死で守り続けることを語っている。けれども、聖書は決して、人について楽観的な見方はしていない。きつと応じてくれるから、今は我慢して尽くしていこう、ではない。聖書が語るのは、「敵を愛せ」であって、それは、いつかは敵ではなくなるからという条件付きの話で

はなく、たとえ振り返ってくれなくても、であるはずだ。

だからやはり、こういう事態を乗り越えていけるかどうかは、ただひたすら、神が共にいて下さることにかかっている。

創世記 41:1-13

後にバビロンの王は、夢を説き明かす者がいないことに腹を立てたけれど、エジプトの王はもう少し冷静ではあつたようだ。おかげで彼は、国を救うことになる大切な人物に出会うことができた。この夢は、ヨセフが救い出されるためのきつかけとして重要であるが、しかし、本来神がこの夢を見せた一番の理由は、エジプトの民を、そしてまた、イスラエルの人々をも救い出すという、そのような意図である。ヨセフの救出は、それに伴って与えられたものと言うべきだ。

様々な出来事を、自分たちのためというふうに解釈してしまうことがあるけれど、それは思い込みが過ぎると思う。神のご計画はもつと大きく、人類全体をも意識して

おられる。その幸いのおこぼれとして、自分もまた大切なことを教えていただけた、というくらいの姿勢が妥当である。自己中心はほどほどにしておきたいものだ。

創世記 41:14-36

ヨセフの態度は、実に誠実である。彼はただ、エジプト王と、そして民を助けたいという願いだけで、この役目を果たしている。献酌官長にはとりなしを願っていたけれど、この場面では自分の身については何も語っていない。そんな事態ではないことをよくよく承知して、そしてまた、神が夢を通して告げられたことの深刻さに震えつつ、彼は自分にできること（解き明かすこと）をしている。

でも、当然ではある。この夢の話も、神が指し示して下さったものである。だとしたら、何よりも優先されるべきは、神が何のためにこの夢を見せたのか、という一点にこそある。彼は間違えなかった。神と共に歩んでいる者として、彼は自分に託された使命が、この御心を人々に伝えること

にこそあるのだと悟ったのである。彼は、横柄な少年だったかもしれないが、誠実に人々のために仕える人となったのだ。これは何よりの幸いであろう。

創世記 41:33-36

ヨセフの能力は、決して夢を説明することだけではない。それはきつかけに過ぎず、ここでも王の見た夢を説明するだけでなく、それよりもっと大事な役目を果たしている。予告された事態に、これから国がどう対処すれば良いのか、その具体策を提示している、という点である。この部分は神が告げたことをそのまま伝えていたのではなくて、ヨセフ自身が考えて、判断したことだと思われる。

もともとヨセフは、ポティファルの家でも、牢獄の中でも、人々の世話をする役割を最良の形で果たしていた。そう、彼に与えられている能力は、そういう管理と問題解決、その集団がより良く営みを続けていくことができるように支えていくためにこそ、大いに発揮されるものであるのだ。

ヨセフが単に夢の意味を説明しただけだったら、それでおしまいだっただろう。だが彼は、自分に与えられている賜物をちゃんと発揮し、人々のために尽くそうとした。それが彼の立場を大きく変化させていったのである。

創世記 41:37-45

パロやエジプトの重臣たちは良き判断力を持っていたようだ。彼らはヨセフの中に、単に夢を語るだけではなく、人々のために具体的に尽くしてくれる能力と志があることを見抜いている。そして、再びヨセフは、「家を治める」ようにと求められることになった。かつては奴隷として侍従長の家を治め、今度は国の No.1 としてエジプト全土を治める。祭司の娘との結婚は、高貴な身分が保証されたという意味合いと共に、やはり神秘的な要素を兼ね備えていることから来るものだろう。それに、アブラハム以来の約束に生きる者であったヨセフには、こういう宗教的な素養のある結婚が望ましかったのだ。

これらすべては、神の導きであると共に（夢を見せたのは神であり、ヨセフの生涯に対する重大な計画をお持ちであったことの表れだ）、ヨセフ自身がどのような境遇でも誠実に尽くしたことによるものでもある。何度も絶望しそうになる状況の中、ヨセフは神にあつて誠実に仕えることを学んだ。まさに彼は、エジプト全国民のために良き人材となったのである。私たちの生き方にはこの誠実さはあるだろうか、と思う。

創世記 41:46-57

「年の豊作と」年の飢饉という事態に対応するため、ヨセフは最も良い手段を用いたようである。難しい仕組みではない。いっぱいあるときにちゃんと蓄えておき、欠乏に備えるということである。ただ、これができる人は多い。目の前にたくさんあるのに節約するのは厳しいことだ。だから、ヨセフが権力を駆使して食料を集めに集めたのは、必要なことだった。54節からすると、豊作ゆえ、力づくで集め回っても、それでも民一般は多くの備蓄を各家庭でも

持っていたようだ。

家庭の備蓄がなくなったとき、国として蓄えていた分を売り出したあたりは、現代の感覚ではひどく思えるかもしれない。55-57のあたりは、冷たいようにも思えるだろう。その箇所については後で見るとして、少なくとも当時、ヨセフのやり方がエジプト全土を飢餓から救ったことは事実のようである。

彼の手法そのものについては、様々な論議があつても良い。ただ、何とかして人々を死なせないように必死に取り組んでいうとしたこと、神にあつて生きる者として、このような課題に全力で取り組んでいったことについては、考えさせられるものだ。新約でも、信仰とは単なる言葉ではなく実行を伴いつつ、人々の益を図っていくことにあるのだと言われているのだから。

創世記 42:1-9

ヤコブの息子たちが食料を求めてエジプトに来るのはごく当たり前のことであるし、5節にあるように、その姿は何一つ目立つ

ことのない、その他大勢と同じものに過ぎなかった。

だが、彼らがヨセフの前に来たときに、神の支配ということが明らかにあった。そう、かつて、ヨセフが見た夢の通りになったのだ。ヨセフ自身も、この瞬間までは全く悟っていなかったに違いない。かつての夢など忘れていたかもしれない。神が共にいてくださっているのも、苦境の中を歩む自分をかawaiiそうに思つて顧みてくださったからと思つていたことだろう。

でも、そうではなかった。神は最初から全体を見渡しつつ、事を動かしてこられていたのだ。そのことを初めから悟る者は少ない。でもせめて、主が事を展開されて、信仰が明らかになってきたときに、それをちゃんと受け止めるものでありたい。

創世記 42:9-17

ヨセフの態度を冷たすぎると批判するのはたやすい。正直なところ、彼自身、どのように対処して良いかわからなかったのではないか。気づかれていないことであるし、

そのまま無視して通り過ぎることもできた。でも、かつての夢が示すように、これが神のなさっていることであるならば、知らないふりをするわけにはいかない。

ただ、にこやかに笑いかけて、すぐさま正体を現すというわけにもいかない。かつての事件は、ヨセフにとっても、兄たちにとつても、ちゃんと解決しなければならぬ出来事であるのだ。それに、今ここで正体を明かしては、50:15にあるように、兄たちはただ恐怖心からひれ伏すだけになってしまう。

どうしたものかと思案するヨセフにとつて、自分の身分から可能な方法は、ひとまず彼らを監禁することではなかったのだと思われる。15節にある「誠実であるかどうかをためす」という言葉が、以降の核心を貫いていく。

創世記 42:18-28

この三日は、ヨセフは神の前に祈り、何が最もふさわしい対応かを尋ね求めた期間であろう。その結果、一人を残して帰らせ、

弟のベニヤミンを連れてくるように言い渡すことにしたのである。自分を失った父ヤコブが、末の息子を旅に出そうとは思えないと、よくよくわかつていての話だろう。それでも連れてくるのか、それとも、兄弟の一人を見捨てるのか。かつて自分を捨てた兄たちを試している。

だが、この時点でヨセフは、一つの良き兆候を目の当たりにしている。兄たちはこの事件を、ヨセフのことと結びつけている。彼らの心に、あの出来事が痛みとなつて残っていたことは、ヨセフには大きな喜びであつたはずだ。悔い改めにはまず、自分が何をしたのかをちゃんとわかっていることが必要であるから。

銀を返したことは、窮乏にある一家から金をもらいたくないということが発端だったろうが、兄たちにとっては、自分らの巻き込まれている事態の不可思議さを恐怖する材料となつている。彼らはまだ、ことの背後に神がおられることに気づいていない。

創世記 42:29-38

事態に恐怖するヤコブは、すでに物事をきちんと判断する余裕を失っているようだ。彼の思いはただ、ベニヤミンを失いたくないという一点にしがみつくものとなつている。そのことが、残してきたシメオンを失うことを意味するのだという点に気づいている様子はない。

ルベンは長男である。だが、彼の説得は功を奏していない。後にユダがした説得とよく似ているのだが、ヤコブはルベンの言葉に耳を貸そうとしない。ルベンが以前、父を裏切ったことが関係しているのかもしれない(35:22)。ルベンとしては真剣に語ったつもりなのだろうが、その言葉は届かない。大切なことであるほどに、その相手との関係がどうであるかは、事が伝わるために、大きく影響するようである。ヤコブは耳も心も閉ざしてしまっている。

創世記 43:1-10

この部分の中心は、ユダの姿である。渉る父親に対して、理を説くと共に、彼はベニヤミンの安全について、自分の身をもつ

て保証する旨を語っている。このことは後に、身代わりを申し出る話につながる。ルベンと言っている内容はさほど違いがないようにも思われるが、それまでの経緯、そしてまた、ユダの真剣さがヤコブを動かしたのだと考えられる。なお、この時点での後継者はすでにユダに移っていた模様であり、ユダは後継者としてのすべてをかけてこの約束をしたのだと言えるだろう。

むろん、その背景には、自分たちはこの件に関しては決して間違ったことをしていないという確信があり、胸を張ってエジプトの総理大臣と会えるという自信があった。それがなければ、こんなことはできない。人間としてできるかぎりのレベルとしてではあるけれど、やはり、きちんと生きているということ、相手に対して後ろめたくない生き方をしているということは、大事なことに取り組むときほど必要になる。

創世記 43:11-15

ヤコブⅡイスラエルの心境は想像するだけでも重苦しい。ベニヤミンを送り出すか、

それとも一族皆で飢え死にするか。選ぶことのできない選択肢を突きつけられることが、人生の中にはありえる。その時ヤコブは、ともかくも自分たちにできる最善のことをなして（贈り物や二倍の銀）、そして末息子の子のベニヤミンを送り出すこと以外に、なしえることはなかった。彼の言葉には、この息子を失う覚悟が込められているように思う。

そして彼は祈る。神があわれんでくださるように、と。最後の最後に、追い詰められるようにして人は、そのように祈るのだが、実はここにこそ、真の答えがあることを、ヤコブはまだ知らず、私たちも大概、そのことを知らずにいる。理解は後回しでもいいから、ともかく神に祈り求めたいものだ。

創世記 43:16-25

事実は小説よりも奇なり、と言うけれど、聖書の記録する歴史は、そのへんの冒険物語を凌駕する。兄弟たちが体験した一連の扱いは、エジプトの大臣が機嫌を直し、自

分たちを信用してくれたようだという期待を抱かせるのに十分なものだった。不安は抱えつつも、彼らは少しずつ落ち着きを取り戻し、事態の完全な打開を願っていたことだろう。その中で彼らは、何かを画策するのではなく、ただ誠実な取り組みをもって自分らの潔白を示そうとしている。以前の彼らであれば、様々に画策して、うまくこと乗り切ってみせようというふうであったのだけれど、今度は違った。そして、それは確かに良い状況をもたらしている。聖書は淡々と語り、あまり論評はしていないけれど、神の御心になう世渡りの方法というものがどこにあるのかは、確かに指し示しているのだと思われる。

創世記 43:26-34

推理小説だったら、このあたりには真相を伝える様々なヒントが見え隠れしているとも言える。兄弟たちが年齢順に座らされたことは、彼ら自身も驚いているわけであるし、また、ベニヤミンの姿を見たとなんにひっこんでしまった大臣。名探偵ならば

推理も可能だったろう。でも彼らはごく普通の、しかもどきどきしてのものであるから、事を悟られはしなかった。ヨセフとしてはほっとしたことだろう。

ベニヤミンの食事が5倍というのは、ヨセフが仕掛けた探りの一つである。かつて自分は、父から特別扱いをされて、兄たちから激しく憎まれた。いま、ベニヤミンが特別扱いをされて、果たして彼らはどのような反応を示すのか。注目点であった。でも兄たちはもはや、そういう心は捨てていたようである。彼らは扱いの違いに気がきながらも、それをねたむでもなく、むしろ、ヨセフの歓待の印として喜び、「酔い心地になった」のである。ねたみからの解放は幸いなものである。

創世記 44:1-13

もちろん、兄弟たちは全くの無実である。彼らは何もしていない。ヨセフの計略は残酷と言われても仕方がないような、ぎりぎりのものであった。やりすぎだと誰かが批判するとしたら、弁解はしない。ただ、そ

の結果として兄弟たちの真の姿がしっかりと見出されていく。彼らの心が確かに変えられていくことが目の前に現されていく。性悪な心は変わり得ないという人もあり、それは多くの場合、私たち人間の実感であるけれども、しかし、この兄たちは変化した。彼ら自身の精進などではない。聖書はそこに、神に働きかけがあることを強く物語っている。

創世記 44:14-17

ユダの語る「咎」とは、盗みをしたという話ではなく、かつてヨセフにしたことを指す。そのこととこの事件とは客観的には関係がないはずだけれど、兄弟たちはこの事態を神からの裁きとして受け止めたということがある。だからこそ、皆で奴隷になるとの覚悟も出てくる。

それに対するヨセフの呼びかけは、以前の兄弟たちであれば飛びついたかもしれない。自分は助かるのだ。どれほどかわいいうベニヤミンでも、自分らにも家族がいて、自分の自由ということがあって、だとした

ら、仕方がないとか、もしかすると本当に盗んだのかもしれないと自分に言い聞かせて、弟を見捨てることもありえただろう。でも、上記のように、かつての罪のゆえにすでに覚悟を決めていた彼らにとっては、ヨセフの言葉は何の魅力にもなりえなかったことだろう。心が変わえられていくとは、そういう変化を伴うものである。

創世記 44:18-34

覚悟を決めたはずのユダが、これだけ長く語ったのは、ヨセフの言葉を聞いて、わずかながらも望みがあると感じたからだろう。むしろそれは、ベニヤミンを助けることができるかもしれない、という望みである。当事者だけ責任を取ればいいのであれば、自分が身代わりになれば、ということである。全員奴隷にという覚悟をしていた彼らに、一縷の望みが生じたのである。必死になるのは当然だ。

ユダの言葉は、盗みそのものについては、何一つ弁明も反論もしていない。実物が見つかってしまった以上は、何を言ってもだ

めだと考えていたのだろう。彼が語るのは、ベニヤミンの存在がどれほど大切かということであり、何とかして救いたいのだと言うことである。この事態の理由を、盗みではなくて、ヨセフ売却事件に見て、神の取り扱いと見ている彼らには、無実の主張はできるはずもない。ただ一つ、あわれみにするこののみ。神と人との関係も同じ方向性にある。

創世記 44:30-34

ユダが身代わりを申し出たのは、ベニヤミンの一切については彼が責任を負うと父ヤコブに約束をしていたからである。そう、いのちをかけての身代わりは、相手の一切を背負うことを意味する。

キリストが私たちの身代わりになって下さったとき、キリストは私たちの一切を背負うと覚悟され、そう宣言されたことになる。時々、キリストの十字架や救いはありがたいけれど、人間たちの愚かさを考えるときに、やはり不安が残り、安堵とはほど遠いという人は少なくない。でもそれは、

キリストの十字架そのものを馬鹿にしているのと同じだ。ユダですら、ベニヤミンの全てを背負ったのだ。ましてキリストが、どうして人々の様々な課題を顧みて下さらないことがあるだろうか。私なんて神に見捨てられていると言う人は、ユダにすら及ばないふうに神を見ているのである。

創世記 45:1-3

ユダの言葉は、彼一人のものではなく、兄弟たち全体のものとして受け止められていたのだろう。ついにヨセフは、兄弟たちが変えられていることを確信することができた。これ以上は、もはや正体を隠しておく必要もない。単刀直入にヨセフは、自分が誰であるのかを明らかにしている。

こうやって兄たちの状況を確認することは、アブラハムへの約束を継承する民として生きていこうとする上で、とりわけヨセフは一連の苦難の中で、神と共に歩んで下さることを確信していたから、曖昧にはできない事柄であったのだ。エサウとヤコブも、神の約束に生きる民としての基本姿勢

があるかどうかを問われた。兄弟たちの場合は、誰か一人に絞り込むのではなく、12人全体として受け止めていくことにはなるのだけれど、なおさらのこと、問われていく必要があったのだ。もし、神の存在への関心が薄すぎるようであれば、その役割を担っていくことはできないのだから。彼らは合格したのである。

創世記 45:4-15

ヨセフははっきりと、自分のたどってきた生涯が神の手によるものであると語っている。むろん、兄たちのしたことは決して肯定できない。けれど、そういった悪事をすら用いて、神は最善をなしてくださるのだと、ヨセフは今、確信している。それは、ここまでの歩みの中で、神が常に自分と共にいてくださったことを知っていたからでもあるだろう。痛みや苦しみはないのが一番だ。けれど、もしもそれがあるとしたら（残念ながらこの世界にはある）、その上でなお、神が働きかけてくださり、恵みを用意してくださっていることを見いだすことができ

るのが、何よりの幸いと言えるのではない。か。そのためにも、神の存在と、働きかけを、少しでも深く知りたいものである。

兄たちが自らの行いについては深く悔いていたので、もはやそこを取りざたする必要がないと考えているのは、人の悪については、神の手に委ねるしかないことを認めていたからでもある。そして、彼らの悔いた心は、きつと神に受け止められて、だからこそこうして再会できたのだと知って、ゆえにヨセフはもはや、兄たちへの復讐は考えていない。復讐するなどの教えは、単なる我慢を告げるものではなく、神の手に委ねることを語るものである。

創世記 45:16-23

パロがこの兄弟たち輪歓迎したことは、ヨセフがどれほどエジプトの国で重宝されていたのかを示す印と言える。それは、ヨセフが真剣に、エジプトの国のため、人々のために尽くしていたことの故である。彼の神に対する真剣な態度は、具体的にはこの国の人々のために尽くす（神の御心に

沿って）という行動として現されていた。

現代の日本でクリスチャンたちが真剣にその信仰を生きる際に、この国の人々のため、いや、もっと小さな事でも良いけれど、自分の周りにいる人々、同僚たち、仲間たち、あるいは学校の連中、そういう人々のために自分の持てる力を用いて尽くしていき、彼らの幸いのために労するという姿があるかどうかと、思わせられる。自分がとりあえず生きるだけで精一杯というのは事実だろうけれども、それでもなお、人々の幸いを願う心があつてこそ、神を信じ、神に生かされていることを感謝する生き様なのだと、ヨセフの姿は物語っているはずだ。

創世記 45:24

この言葉は、とても鋭いものであり、また、心痛むものでもある。悲壮な思いでエジプトにやってきた兄弟たちにとって、事態が好転したのであるけれど、しかし、こうなるとまた、争いが生ずることが多い。かつての事件について、改めて誰が悪かったのかと言い争ったり、ヨセフの復讐があ

るのではないかと言いつ争ったり、さもなければ、ヨセフやエジプトの好意に甘えて良いのかとか、そんなことをしたら一生ヨセフに頭が上がりなくなるとか、争いの種はいくらでも思い浮かぶ。いや、思い浮かんでしまうことが悲しい。ヨセフが案じたのは当然であり、そしてまた、こんなふうに案じてしまうことも悲しいのだ。

幸いにも、兄たちは争いよりも驚嘆の方が大きかったようで、一目散に家に戻っている。そのあたりは、ほっとさせられる。せつかくの幸いがどちらに進むかは、大きな分岐点になるのではないか。

創世記 45:25-28

神様が聖書を、教科書か何かのようではなく、出来事を記録するノンフィクションのようなもので与えてくださったのは、何とも幸いであつたと思う。今日のような箇所は、説明だけではただ読み流してしまいそうだけれど、こうやって書いてくれればヤコブの心境が直に感じられて、心が熱くなるというものだ。ヨセフが生きていると

いう知らせを、ヤコブは神のご配慮として受け止めたに違いない。まさに奇跡。だからこそ、エジプトへと呼ぶヨセフの申し出に、彼の心は動いたのである。

創世記 46:1-7

神がわざわざ出てこられたのは、ヤコブがエジプト行きをためらっていたからだ。もちろん行きたい。神の与えてくださった再会だとも思う。でも、ヤコブの脳裏には、約束の地カナンを離れて、エジプトになど行ってしまうって良いのか、という不安があった。アブラハムもイサクも、飢饉を逃れて他の地に移住しようとしたとき、大きな過ちに陥り、結局は戻ってくることになった。大きな国に頼るのではなく、神にこそ頼れという教えは、三代に渡りしっかりと伝えられていたのである。

でも、今回は別だ。神が用意されたヨセフのところへ行くのである。エジプトという国に頼るのではない。だから、行って良いと、改めて神からの知らせがあった。もっとも、飢饉が終わってもエジプトに留まっ

たことについては、はたしてどう考えるべきか、思案のしどころである。

創世記 46:8-27

ほとんどの名前は、あまり馴染みがない。記憶に残っているとすれば、レビの家系とユダの家系くらいだろうか。後々のキリストへとつながる家系ということだけを考えるなら、その程度でも十分で、他は無視しても良いと言われてしまうかもしれない。北イスラエルに属することになる人々などは、いずれは消えていくのだ。でも、聖書はしばしば、こうやって事細かに人々の名前を記録していく。二度と登場しない人々も含めてである。そこには神の思いが込められているのだと思う。つまり、この全ての人々について、名もないと言われるような人も含めて、少なくともその時、彼らが生きているその時、神はその人々の存在に注目し、関心を抱き、大切に思われていた、その心が反映されているのだと思う。私たちの世界は、社会的に影響がどうか、そういうことから見ていることが多いけれど、

神の関心は違うようだ。

創世記 46:28-34

ヨセフは、アブラハムの契約をよく理解していたようである。エジプトに呼び寄せたけれど、それは一時的なもの、エジプトに同化させてしまうわけにはいかない。アブラハムに与えられた使命を果たしていくためには、独自の集団であり続ける必要があったのだ。だから、嘘ではないけれど、上手に計略を用いて、イスラエル一族の住む場所がエジプト人とは離れたところになるように仕向けている。

エジプト脱出の時まで、居住地ということでは確かに隔離されてきた。でも、後のイスラエルはせっかくのヨセフの配慮を無駄にしまったようである。彼らの感覚はエジプト一般と同化している。それでも混じり合わずに、民族としての独自性を保てたのは、彼らが奴隷になっていたからである。とすれば、エジプトに留まり続けてしまったイスラエルを保持するための最後の手段が、奴隷にすることだったのかも

しれないと言ったら、考えすぎだろうか。

創世記 47:1-6

パロの対応は、ひたすら好意的である。ヨセフの計略も必要がなかったかもしれないほどだ。手放しで歓迎しているその理由は、ただ一つである。そう、エジプトの国にとって、ヨセフがどれほど貴重な存在であつたか、国のため、民のために、どれほど良いことをしてくれたか、その一点が、パロをしてここまでの態度としている。

キリスト教への好意を持つてほしいとか、認めて欲しい、というようなことが言われたりする。時に、反対する人々の間違いを指摘して、ということもある。その行動そのものは正しいだろう。でも、物事を動かし、社会を動かす力は、そういう闘争ではないのかもしれない。もっと単純に、人々のために、社会のために精一杯尽くし、人々の幸いを追い求めることこそが、実は認知され、受け入れられるための基本なのだと思う。もちろん、だからといって、信仰そのものに心を開いてくれるとは限らない。

それはまた別の話。でも、反対から容認、好意、という変化は、そこまでだとしても大いに意味がある。

創世記 47:7-12

ヤコブに対するパロの態度は、年長者に対する敬意が見えるように思う。130年という月日を歩んできた存在は、大国エジプトの王をしても敬意を払わせるものなのだ。というよりも、そういう意識を持ち得る王であつたからこそ、この時のエジプトはヨセフを認め、国を救うことができたのだろう。

一方でヤコブは、とても謙虚である。その年齢と経験をおごるでもなく、自らを小さなものとして語っている。以前のヤコブであれば、ここは絶好の機会とばかりに、自らを売り込んだかもしれない。でも今、彼は長い日々の中で主から教えられてきたのだ。そして、彼の言っていることは真実だ。彼の祖父たちは130年程度のものではない。もっと、もっとと長生きしている。回りから見ればヤコブはすごいかもしれない

が、実は違う。そのことをちゃんとわきまえられることは、人として実に幸いである。

創世記 47:13-26

この記事によれば、それまでのエジプトは個々人が土地を所有する状態だったものが、飢饉とヨセフの対応を経て、すべて王のものになったということになる。歴史家によれば、ヨセフ時代のエジプトは、異民族が入り込んで王家を築いていた時期であるようなので、古代エジプト史の大半を占める王国の形態とは違って、王の存在がもっと身近であつたのだろう。

現代の私たちの目には、自作農が奴隷に身を落としていく光景は、何ともひどいものに映る。ヨセフも残酷な政策をしたものだという批判も出てくるかもしれない。けれど、そういう価値観を棚上げにしてこの箇所を読むと、ヨセフが様々な方策を考え出して、何としても食料を人々に供給し続けてくれていたという、いのちの恩人としての思いこそが、民衆の思いであつたようだ。他の時代であれば、他の方策もあつた

かもしれない。でも聖書は、あの時代におけるヨセフの取り組みを、誠実なものとして評価しているのである。

創世記 47:27-31

エジプトに住んだイスラエル一族の後日談が語られていく。その繁栄にも触れられているが、しかし聖書は、ヤコブという人物の生涯が終わろうとしていることに、注目している。

この時期のヤコブの関心事としてまず取り上げられているのは、カナンに帰ることであった。状況からして、一族皆がカナンに戻るのには容易でないと感じていたヤコブは、自分の埋葬地は必ずカナンに、と言い残している。それは、一族のルーツはエジプトではなくカナンにこそあるのだ、ということの子や孫たちにはつきりと指し示す行動であったと言える。

私たちもそれぞれ、自分の根っこはどこにあるのかについて、時折、ちゃんと確認した方が良いと思う。それは墓のありかには限らないけれど。私たちの国籍は天にあ

り、と確信するなら、それもまた、時々、具体的な行動を伴って確かめ直している方が良い。

創世記 48:1-6

死期を前にして、ヤコブは後継者のことについて思いを傾けている。そして、ヨセフはすでにエジプトに属することになってしまったから、代わりにその息子二人を、我が子の中に加えるのだと言っている。二人であるから、ヨセフには他の兄弟二人分、という意味合いでもある。ともかく、後を継ぐ者たちを絶やしてはならないという思いが見える。

それにしても、ヤコブまでの代においては、約束を継ぐのは兄弟の中でも一人だけ、であった。だが、ここからは兄弟全部、ということになっている。もともと、神の約束は一子相伝というわけではなかったから、こうして約束を受け継ぐものが増え広がっていくのは、御心の本来に合致するものでもあるろう。ヤコブには様々な問題もあったけれど、彼はこの約束の性質を理解するよ

うになっていたのだ。アブラハムへの神の約束にある通り、子孫は増え広がっていく。それはもちろん祝福である。では、約束の継承という点でもまた、理解し、意識する者たちが増え広がっていくかどうか。ここからはそれが問われるのだ。

創世記 49

ここで唐突に、ヤコブの心はラケルへと傾けられている。彼の最愛の妻であり、そのために40年の労働にも耐えた相手である。だが、そのラケルはすでにない。彼女は、アブラハム一族の墓にも葬ることができず、旅の途中で埋葬されている。同じ墓に葬られることを大事と思うなら、ラケルとはそれすらもかなわないわけで、老いたヤコブにとつて心の痛む悲しみであったのだ。

約束継承の話とは関係がないかもしれない。だが、こうして後継者が確保できている彼にとつては、その安堵のゆえにこそなおさら、ラケルへの思いに浸りたくなったのも分かるような気がする。彼はその使命

を果たし終えようとしている。彼の名は、後の民族全体の名となった。彼はまさに祝福の源となっている。だが、彼の性格と行状ゆえに、彼は多くのものを失ってきたこともまた、忘れるわけにはいかない。

創世記 48:8-20

14節の言い方からして、ヤコブは意図的に、兄と弟を入れ替えたのだ。それはかつて、自分と兄エサウとの間でなされたこと。10節のように、目が見えなくなっている点も、まさに21章のままである。

けれど、今、ヤコブはだまされてではなく、はっきりとした意図を持って、兄と弟を入れ替えている。そこに神の御心があることを確信して。そう、かつてヤコブは、ただ自分の思いだけで長子の権利を奪い取ろうとした。だが、もともと神の心は、ヤコブにということを決まっていたものであった。人間たちは勝手に右往左往し、互いに傷つけ合い、ヤコブも母の死に目には会えなくなり。だが、それでもなお、神の計画はその通りになる。もっと早く、神の

心を尋ね求め、それに従っていたら、あんなに苦労しなくても済んだのに。

今、ヤコブは、エフラ임とマナセを入れ替えることで、自らの愚かさ、神への信頼の必要性を、強く語りかけている。読み手は、彼の告白をしっかりと受け止めねばならない。

創世記 49:21-22

シエケムを取った事件は、聖書には見いだせない。24章はいったんは被害を与えたものの、すぐさま逃げているので、「取った」とは言えない。だが、おそらくその後、復讐を狙ってきたシエケムと戦う必要が生じて、勝ち取ったのではないかと思われる。

だとすれば、この町を兄たちに託すのは無理だ。彼らは当事者であり、町の人々も認めない。ここは、部外者であったヨセフ、しかも、エジプトの権力者であるヨセフならば、何とか収まるとの判断だろう。そしてまた、ヨセフの知恵と性質にも期待して、である。

争いは初めからないのが一番だ。でも、

もしもそうなってしまったのなら、何としても鎮めるために、必死の取り組みをすべきであるし、知恵を働かせ、また、人を選ぶ必要があるのだ。

創世記 49:1-27

ヤコブの遺言であるが、預言的な意味合いも見出される。この言葉によって十二部族の命運が規定されてしまうわけではなく、それぞれの行く末は、それぞれの時代の各部族のあり方によって定まってくるのではある。それでもなお、ヤコブの言葉には考えさせられるものが含まれているので、そのあたりに注目しつつ、後々の歴史をも読んでいただきたい。全部は取り上げないけれど、数日にわたり、注目点をいくつか上げる。今日はまず、全体を流して読んで欲しい。

創世記 50:1-4

ルベン、父ヤコブのそばめと関係を持った。長男であり、年齢的な近さがあつ

たのだろう。でも、古代であろうがなからうが、これは認められない。彼にはヨセフの事件にも見られるように、年長者としての落ち着いた判断などは見られるし、弟たちへの思いやりも見られる。だが、悪くない資質を持っていたとしても、そこに重大なものがあるとしたら、その影響は決定的に大きくなってしまふ。彼は、長男としての資格、立場を失うことになる。

罪の結果は重い。気の迷いであるとか、他の価値を考えれば、という論理は、神の前には通用しない。聖書は罪の結果を厳しく語る。そして、だからこそ、神ご自身の犠牲によって与えられる、特別な「赦し」が必要となるのだ。

創世記 49:5-7

シメオンとレビのしでかしたことは、⁶本章にあるシェケムの町でのものである。彼らなりの理由はある、決して私利私欲のためではないけれど、でも、考えがなさ過ぎ、かつ、卑怯でもあった。ヤコブはそれを抑えられなかったけれど、決して認めてはい

なかったのである。こういった宣告の重さを、よくよく考えて、受け止めていく必要がある。

なお、後にシメオンは独立した民族としては成り立たなくなつて、ユダに吸収されていく。レビは、その理由は全く別にあるのだけれど、イスラエルの中で独立した領地を確保せずに、諸部族の中に住み、人々輪仕える役目を果たしていく。彼らは「散らされた」のである。

創世記 49:9-12

ユダは、ヤコブの最初の子どもたち一弾に属する。そして、兄たちが資格を失つていく中、総領息子的な立場をすでに持っていたのだろう。この子に任せるしかない、という思いが見えるようだ。ヤコブの言葉そのものは、そのあたりの程度を意味したのだと思うが、この言葉は後のダビデ王家を真つ直ぐに指し示すことになっている。初めから神はユダから王をと決めていた、というふうに受け止めるのは考えすぎである。だが、ヨセフとの対峙の中で示したユ

ダの資質は、確かに王位を継いでいくのに適したものだったと言える。後々、ユダ部族が良く整えられていく様子からも、こういった資質をしつかり次の者たちに伝えていく、養つていくことに、彼らは成功したのだと思われる。そこには、ユダ自身が失敗から学ばせられたことも大いに関わっているはずだ。

創世記 49:22-26

途中の者たちは割愛する。ヤコブの思いは、ヨセフに向けられている。だが、今度は単なる依怙彘肩ではない。神がヨセフを選び、ヨセフを用い、そして今の安全もあるのだということを意識してのもの。今度こそ彼は、神の御心に従つて後継者を選んで行っている。それはユダではなく、やはりヨセフが柱となつていくのだ。

後に、エフライムは北側の部族の中心となり、イスラエルを繁栄させるのに大いに貢献し、そしてまた、分裂後の中心ともなっていく。確かにヤコブの言葉通りであるが、それだけでは真の祝福には至り得ないこと

が分かるだろう。

創世記 49:27

ベニヤミンは年若い子であったはずで、すでに成人していたにしても、ヤコブにとってはいつまでも末っ子であったはずだ。それにしてもなかなか厳しい言葉である。

これと関連して思い起こすのは、士師記の終わりのほうで、ベニヤミン部族があやうく消滅する事態になったことである。その光景は、まさに狼のようであった。この事件はおどましいけれど、後でしっかりと読んでいただきたい（士師記 18-21章）。

創世記 49:28-33

神の言葉を受け取って他の人々に伝える役目は、後には特殊な人々にのみ与えられた資質と考えられるようになったけれど、この頃は神との深い関わりを持つ者たちは、皆、他の人に対して神の心を伝える役目を果たしていたのだと言える。本来は、それが当然のありかたである。今の私たちにし

ても、である。

イサクの最期の言葉は、埋葬地に関するものだ。彼は、アブラハムの約束を受け継いだ者として、同じ墓に葬られることを望んでいる。埋葬ということに関して、彼らはかなり重要な事柄として意識しているのが分かる。もちろん、日本のようにご先祖様が守ってくれる、ということではない。神ご自身が守り支えてくださることの、大切な表明の場としての墓であった。私たちが人を葬る時にも参考になる記載である。

創世記 50:1-14

エジプトの国を挙げて荘厳な葬儀は、ヨセフがこの国のためにどれほど貢献したかを示している。彼は、飢饉のために滅びかねなかった国を守ったのだから。人々のために尽くす行為は、後にキリストが「隣人を愛せ」と語られた言葉にも通ずる。ヨセフほど大きな話ではなくても、人は誰でも、その人のなすべき「隣人を愛する」行為が求められているはずである。それに気づくかどうかは、大きな違いとなるのだが。

イスラエルの一族は、この葬儀のためにカナンに戻った。しかし、彼らがエジプトに戻るつもりであることは、子どもたちを残してきたと8節に記されているところからも、かなり強調されている。この時点でのそういった選択について、聖書は何も評価はしていない。エジプト滞在はこの民が増え広がるためには良い環境でもあっただろう。けれど、たとえ良い結果を含む行動であったとしても、そのすべてが本当に良いことであったかどうかは、一概には言えない。まもなく創世記は終わる。そして聖書は、あの奴隷時代を語るのである。

創世記 50:15-21

赦しというのは、赦す側にとって難しいことであると共に、赦される側にとっても難しいことであると痛感する。兄たちは、赦されたことを確信できず、不安におのっている。ヨセフの涙は、自分の言葉が信じてもらえなかったことに対するものだろう。でも、人間同士のことで言うならば、これが現実なのだと思う。

けれど、この赦しには神が関わっている。ヨセフは、自分がエジプトに来たことは神の計画だったのだと告げていた。もちろん人間的な感情としても赦した。それだけでなく、神の配慮があつて、一族が助かるためのものであつたことを含めて、彼はあの厳しい日々を恨みはしないのだと言つただ。むろん、兄たちは、結果が良かったのだからと威張るわけにはいかない。でも、ヨセフの確信を受け止めて、彼の赦しが本物であることを信じるものではありたいものだった。

人と人との間の憎しみは、簡単には消えない。そこに神が関わっておられることを知るときにこそ、赦し、赦される関係への確信を持つことができる。広い心で受け止めよ、ではなく、神に委ねよ、というのが、聖書の教える赦しであるのだから。

創世記 50:22-26

アブラハムからヤコブまでに比べると、ヨセフは短命である。兄たちよりも早く死んだようにも見える。とは言え、エジプト

の大臣になつてから80年を過ごしているのだから、十分に活躍したとも言える。ゆつくりと長く生きるのと、燃えさかるように短く生きるのと、どちらを好むかは人によって違ふだろうが、でも、人の命を決めるのは神ご自身であるからして、私たちは目の前の今を生きる以外にはない。まあ、110歳は現代の感覚では十分に長いだろうが。

この終わりの時になつて、ヨセフは初めて、カナンへの帰還について語っている。今はあくまでも一時避難に過ぎないのだということを、ヨセフは悟っていた。彼らがいるべき場所は、そして、アブラハムに託された使命をはたいていくための場所は、このエジプトではない。イスラエルは結局、エジプトの民とは同化しなかった。そうなることも不思議ではなかったのに。それゆえに厳しい事態に至るのだけれど、その方向性は神が与えられたものだ。この世に住み、かつ、この世に同調せず。この生き方が神の民には問われている。